

保健体育科における学びに向かう力を育てる学習指導の研究
—「学びの軌跡シート」を活用した3つの分析活動を通して—

長期派遣研修員 宗像市立城山中学校 教諭 吉廣 精人

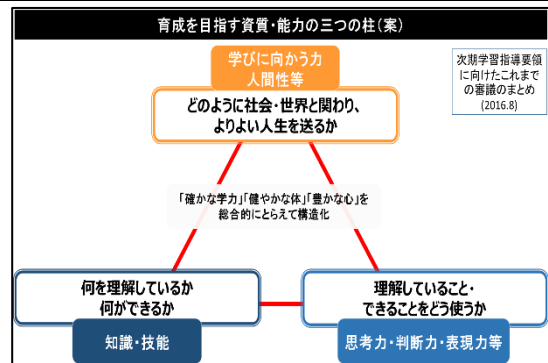
I 主題設定の理由

1 社会の要請から

生徒たちを取り巻く社会環境は、グローバル化や情報化の進展などにより、予想を超えたスピードで多様に変化している。このような社会環境の中では、解決困難な課題に出会う機会の増加も予想され、不確実なものにも挑戦する意欲や態度、多様な価値観を受け入れながらも課題を解決していこうとする姿勢が必要となってくる。平成28年8月に示された「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ」において、生徒たちが、これらの社会と向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力を、次のように整理している。

- 「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」
- 「理解していること・できることをどう使うか
(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)」
- 「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか
(学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)」

また、これら3つの資質・能力を、生徒の発達の段階に応じて、それぞれバランス良く育てていくことが重要であると述べている。【資料1】中でも、「学びに向かう力」は、「主体的に学習に取り組む態度」や「自己の感情や行動を統制する能力、自らの思考のプロセス等を客観的に捉える力」からなり、「個別の知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」を、どのような方向性で働かせるか決定付ける重要な要素であるとされている。



【資料1：育成すべき資質・能力の三つの柱】

したがって、生徒たちの学びに向かう力を育てることは、予想を超えたスピードで変化している社会環境を生き抜く力につながるという観点からも大変意義があるものとする。

2 保健体育科教育のねらいから

現行の「中学校学習指導要領解説 保健体育編」において、保健体育科の目標を次のように示している。

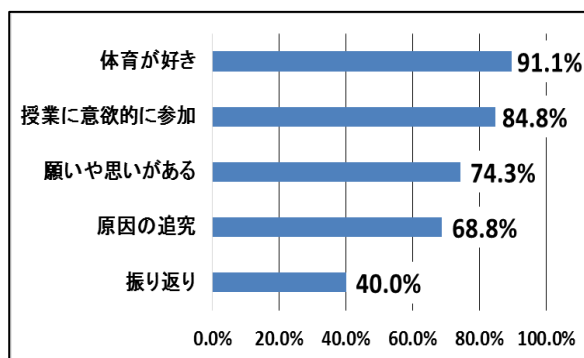
心と体を一体としてとらえ、運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てる。

これまでの保健体育科の指導では、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視し、体育と保健との一層の関連や発達の段階に応じた指導内容の明確化や体系化を図りつつ、指導と評価の充実を進めてきた。その結果、「体育・保健体育、健康、安全ワーキンググループにおける審議の取りまとめ（2016.5）」では、「運動やスポーツが好きな児童生徒の割合が高まったこと」「体力の低下傾向に歯止めがかかったこと」等の一定の成果がみられた、とある。しかし、「平成 28 年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の質問紙項目「中学校を卒業した後、自主的に運動やスポーツをする時間をもちたいと思いますか。」では、男子は 34.9%、女子は 48.0%が「思わない」「分からない」と回答している。このことは、運動やスポーツが好きな生徒の割合は高くなっているものの、その運動やスポーツを継続して取り組もうとする態度が身に付いていないのではないかと考える。

よって、保健体育科における学びに向かう力を育てることは、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てる」ことにつながると考えられるので、大変意義深いことと考える。

3 生徒の実態から

本校（宗像市立城山中学校）は 700 名を超える大規模校である。調査対象である第 3 学年 3・4 組の男子に事前アンケートを行った結果【資料 2】、体育が好きな生徒は 91.1%、体育の授業に意欲的に臨んでいる生徒は 84.8%であった。しかし、「平成 27 年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の生徒の質問調査では、運動部活動や社会体育への参加率については 79.9%であり、全国値（86.7%）と比べると低いことがわかった。



【資料 2：事前アンケートの結果】

これより、本校の生徒は、授業への参加意欲はあるものの、授業で学んだことを活かして、運動を続けようとする意欲が低いと考えられる。また、「ああなりたい」「こうなりたい」という願いや思い（目標）をもって練習している生徒は 74.3%であったが、思いとは逆に、「思い通りの動きができなかった時、その原因（課題）を追究している」生徒は 68.8%、「自分は何を学習したのか、振り返るようにしている」生徒は 40%と低い値を示している。

このように、授業への参加意欲は高いが、運動やスポーツを続けていこうとする意欲が低いことから、学んだことを運動の場面に活かしたり、生涯にわたって運動を続けていこうとしたりする態度が身に付いていないと考える。

4 これまでの授業の反省から

これまでの私の授業は、生徒に身に付けて欲しい重要語句（技能のポイント）を黒板や学習プリントを活用して、分かりやすく説明したり、解説したりし、技能の高い生徒をグループの代表者として配置し、教える内容や技能のポイント、評価の基準等を全体で共有した上で、その生徒を中心に教え合い学習を展開してきた。その結果、ある一定の技能の定着を図ることはできたが、次のような課題があった。

- 「なぜ、この内容を身に付けたいといけぬのか」「この内容を身に付けることで、結果はどうなるのか」等の、生徒に必要感や見通しをもたせないまま授業を展開してしまっていた。
- グループの代表者がグループの仲間に教える活動では、教えてもらう生徒は、自分の意見を言ったり、自分の考えをもって交流したりするという活動が少なかった。
- 「なぜ、技能が高まったのか、技能が高まらなかったのか」を振り返る活動が少なく、自分の生活や行動につなげることができていなかった。

そこで、生徒の実態とこれまでの授業の反省を踏まえ、学んだことを運動の場面に活かしたり、生涯にわたって運動を続けていこうとしたりする力、つまり、保健体育科における学びに向かう力を育てる本研究は、意義深いと考える。

II 主題・副主題の意味

1 主題の意味

(1) 「学びに向かう力」について

学びに向かう力とは、学んだことを人生や社会に活かそうとする態度のことである。

鹿毛雅治氏は、態度について「一定の物事、事象、人物などに対する人の行動に影響を及ぼす内的状態」と述べている。「学んだことを人生や社会に活かそうとする態度」とは、学習課題に対して「やってみたい」という関心や「成し遂げよう」とする意欲に根ざした「積極的に発揮していこうとする気持ち」をもち、行動を起こすことができる心理状態があることと考える。

「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ」では、学びに向かう力とは、「身に付けた『知識・技能』、『思考力・判断力・表現力等』を、どのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素である。」とあり、「主体的に学習に取り組む態度」と「自己の感情や行動を統制する能力、自らの思考のプロセス等を客観的に捉える力（メタ認知）」が含まれる、と述べている。また、生徒の学びに向かう力を高めるためには、「実社会や実生活に関連した課題などを通じて動機付けを行い、子供たちの学びへの興味と努力し続ける意志を喚起すること」、また、「学習の成果を振り返って次の学びにつなげていくこと」が重要であるとも述べている。

このことより、「学びに向かう力」とは、「やってみたい」という関心と、「やっていこう」とする意欲をもち、学びの過程を振り返り、次への活動につなげようとする態度と捉える。

(2) 「保健体育科における学びに向かう力」について

保健体育科における学びに向かう力とは、「運動をやりたい」という関心や「運動をやりたい」とする意欲に根ざした「積極的に運動していこうとする気持ち」をもち、運動したり、生涯にわたって運動を続けていこうとしたりする態度のことである。

「積極的に運動をしていこうとする気持ち」をもつためには、運動に対して「やってみたい」という関心と、「やっていこう」とする意欲、さらには、「またやりたい」という態度を身に付けることが重要であると考え。関心・意欲・態度について、北俊夫氏は、関心・意欲・態度には、それぞれ独自の意味や内容があるとし、以下のように定義している。

「関心」 ある事象に対して興味をもって心にかけること
「意欲」 積極的にかかわろうとする意志や気持ちをもつようになること
「態度」 自分の意志や感情を表情や身振りや言葉遣いなどで外部に表出すること

また、これらには関心から意欲へ、さらに態度へと関連性や発展性があると述べている。「関心」「意欲」「態度」は、自分がやってみたいという運動についての理解が深まることでより興味をもち（関心）、「この方法ならできそうだ」という見通しをもつことで積極的に運動に関わろうとし（意欲）、課題を解決して成果が出たという自信から「またやりたい」という思いを抱く（態度）という順で、段階的に身に付くと考える。

つまり、「保健体育科における学びに向かう力」とは、運動について深く理解して「やってみたい」という思いをもち、運動の課題解決の見通しをもって、意欲的に課題解決に取り組み、技能が高まったことから「またやりたい」といった心情が高まった状態であると考ええる。

以上のことより、保健体育科における学びに向かう力が育った生徒像を以下のように設定する。

- ア 運動の行い方に関する知識を身に付け、「やってみたい」という関心をもつ生徒 (知識・関心)
- イ 運動の課題解決の見通しをもち、「やっていこう」とする意欲をもつ生徒 (思考・意欲)
- ウ 技能を高め、「またやろう」という次への期待感を抱く生徒 (技能・態度)

2 副主題の意味

(1) 「学びの軌跡シート」について

学びの軌跡シートとは、学習課題を解決していくための過程を順序立てて記入していくシートである。

自己の課題を記入する		グループで課題の優先順位と練習方法を検討し、記入する				課題の達成状況を記入する	
1	学習到達度リスト	課題の優先順位	練習方法	課題解決のための具体的な体の動かし方・使い方	課題の達成 (○・×)	【学び方を振り返ろう】 次の視点から学び方を振り返ろう ○課題設定 ○練習方法の選択 ○技能が高まった原因、高まらなかった原因 ○新たな発見(課題)	
	バックハンドジャンプ(足元は全体重をのり)	3	5	足の踏み込み	○	体重が動かしきれていないという課題に対して、友達とラリーをしたら、一定のリズムでステップをふんで打つことができた。そして、打つタイミングを角度に合わせていまいという新たな課題が浮かんだ。それは手の位置が違っていて、いろいろ試みたいに思ってしまったからだ。これは手の位置を意識して打つことにしたい。	
	後ろから前に体重移動	2	5	足のステップ	○		
		3	4	5	6		
*新たな課題を再設定する場合							
	2	学習到達度リスト	優先順位	練習方法	課題解決のための具体的な体の動かし方・使い方	課題の達成 (○・×)	
		半身で打つ	1	5	腕の振り	○	
		打つタイミングが合っていない			腕と手首	×	
グループの仲間から指摘された課題を記入する		課題を解決するために必要な体の動かし方について記入する				学びの過程を振り返り、記入する	

【資料3：バドミントンの学びの軌跡シート】

「学びの軌跡シート」には、**1**自分で設定した学習課題や**2**仲間から指摘された課題、それを解決するための**3**優先順位、**4**練習方法、**5**具体的な体の動かし方、**6**評価、**7**学びを振り返る欄を設ける。この内容を学習活動に沿って記入していくことで、自分の課題の解決過程をまとめることができるので、学習後にこのシートを見直すことで、一目で自分の思考の過程を客観的に確認することができる【資料3】。

(2)「分析活動」について

分析活動とは、自己評価と相互評価を関連付けて、技能のポイント、課題、技能の高まりがどうであったかを明らかにしていく活動である。

本研究における相互評価とは、自分で決定したものと他者の考えを検討することで、自分が知らない情報や見方、考え方を明らかにすることである。つまり、自分の考え（自己評価）に、他者の考えが加わることにより（相互評価）、信頼性や客観性、妥当性が高まり、適切な自己理解ができるようになる。

(3)「学びの軌跡シートを活用した3つの分析活動」について

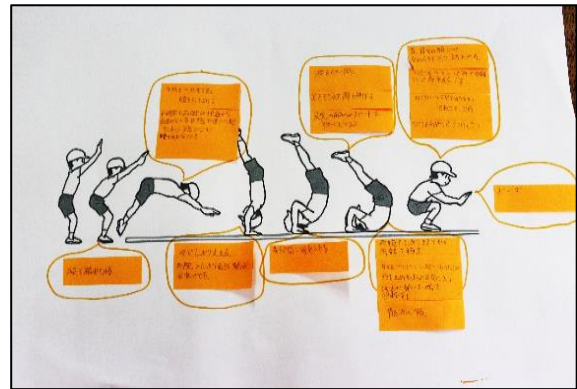
学びの軌跡シートを活用した3つの分析活動とは、学習課題を解決していくための過程を順序立てて記入していくシートを使い、自己評価と相互評価を関連付けて、技能のポイント、課題、技能の高まりがどうであったかを明らかにしていく活動である。

具体的には、より高めたい技能を選択し、技能のポイントを調べ、それを仲間と検討する『分析活動1』、課題を設定し、適切な課題かどうかを仲間と検討して、課題の解決方法を仲間と検討し、決定する『分析活動2』、技能の高まりを確かめ、課題解決の過程を振り返る『分析活動3』を位置付けた3段階の活動である【資料4】。

段階	過程	活動	ねらい
一次	分析活動1	①試しのゲームや試技から、より高めたい技能を選択する。 ②その技能のポイントを調べる。 ③仲間と技能のポイントを検討する。 【相互評価】	・運動の行い方に関する知識を身に付け、「やってみたい」という関心をもつことができるようにする。 (関心・知識)
二次	分析活動2	①自分で課題を設定する。 【自己評価】 ②グループで各自の課題を検討し合う。 【相互評価】 ③解決していく課題の優先順位とその課題解決を目指した練習方法、具体的な体の動かし方について検討し、決定する。	・運動の課題解決の見通しをもち、「やっていこう」とする意欲をもつことができるようにする。 (思考・意欲) ・技能を高め、「またやろう」という次への期待感を抱くことができるようにする。 (技能・態度)
	分析活動3	①技能の高まりを自分で確認する。 【自己評価】 ②グループで各自の技能の高まりを確かめ合う。 【相互評価】 ③自己の課題解決の過程を振り返る。	
三次	発揮	演技会、ゲーム	・これまで学習してきたことを発揮することができるようにする。

【資料4：学びの軌跡シートを活用した3つの分析活動】

具体的には、始めに、『分析活動 1』において、試しのゲームや試技を行い、自らの意志で「より高めたい」と思った技能を選択する。次に、その技能のポイント調べ、技能チェックシートに書き込む活動を設定する【資料 5】。最後に、同じ技能を選択した仲間とグループをつくり、自分の考えた技能のポイントを付箋紙に書き込み、全体の技能チェックシートに貼り付けて、運動のポイントに関する自分の考えと仲間の考えを検討する活動を設定する（相互評価）。そこで、仲間の考えから、自分が気付かなかった技能のポイントを自分の技能チェックシートに書き加える。このように、自己決定したことを調べ、それを仲間と検討し合うことで、よりわかるようになり、「やってみたい」という関心をもつことができると考える。

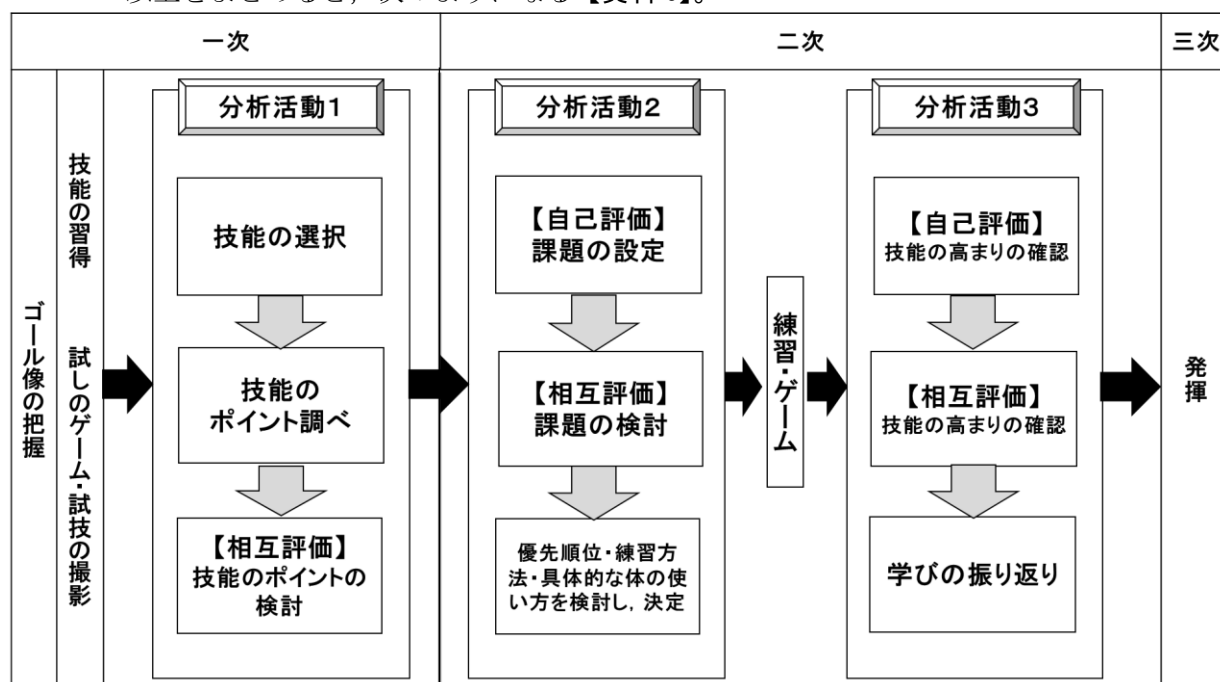


【資料 5：技能チェックシート】

次に、『分析活動 2』では、始めに、自己の課題を設定するために、自己の試しのゲームや試技の映像を視聴し、「学びの軌跡シート」の①の課題リスト欄に課題を書き込む活動を設定する（自己評価）。次に、適切な課題になるように、グループで仲間の試しのゲームや試技を見合う活動を設定する（相互評価）。その際、適切な課題が設定されていないとグループの仲間が判断したときは、②に課題を追加し、「学びの軌跡シート」に記入する。さらに、解決していく課題の優先順位、課題解決を目指した練習方法と具体的な体の動かし方について検討し、「学びの軌跡シート」の③、④、⑤に記入する活動を設定する。そうすることで、どの課題を優先的に練習したらよいか、また、その課題を解決するためには、どの練習方法が適切なのか、さらに、その練習を行うときに、具体的に体のどの部分を意識したらよいか、が明確になり、課題解決につながる練習を行うことができると考える。

最後に、『分析活動 3』では、始めに、自己のゲームや演技の映像を視聴し、技能の高まりを確認する活動を設定する（自己評価）。次に、グループで各自の技能の高まりを確かめ合い、「学びの軌跡シート」の⑥に記入する活動を設定する（相互評価）。さらに、「なぜ、技能が高まったのか」「なぜ、技能が高まらなかったのか」を課題設定や練習方法の選択、具体的な体の動かし方の視点からの振り返り、「学びの軌跡シート」の⑦に記入する活動を通して、運動の課題解決の見通しをもち、意欲をもって課題解決に向かい、技能が高まった達成感から、「またやろう」という次への期待感を抱くことができると考える。

以上をまとめると、次のようになる【資料6】。



※分析活動2と分析活動3は、分析活動1で選択した技能それぞれで行う。

【資料6：学びの軌跡シートを活用した3つの分析活動の全体図】

以上のような「学びの軌跡シート」を活用した3つの分析活動を通して、生徒たちは、運動の行い方に関する知識を身に付け、「やってみたい」という関心をもつこと、運動の課題解決の見通しをもち、「やっていこう」とする意欲をもつこと、技能が高まった達成感から、「またやろう」という次への期待感を抱くことができるので、保健体育科における学びに向かう力を育てることができる考える。

III 研究の目標

「学びの軌跡シート」を活用した3つの分析活動を通して、保健体育科における学びに向かう力を育てる学習指導の方法を究明する。

IV 研究の仮説

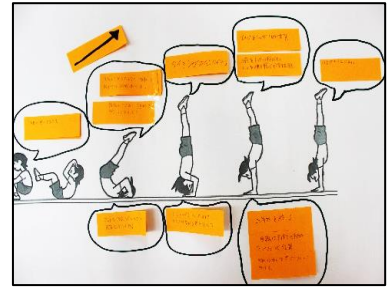
中学校保健体育科の学習において、「学びの軌跡シート」を活用した3つの分析活動を行えば、生徒たちは、運動の行い方に関する知識を身に付けて「やってみたい」という関心をもち、運動の課題解決の見通しをもって「やっていこう」とする意欲をもち、技能が高まった達成感から、「またやろう」という次への期待感を抱くことができるので、保健体育科における学びに向かう力を育てることができるであろう。

V 研究の具体的構想

1 「学びの軌跡シート」を活用した3つの分析活動を旺盛にする具体的支援

(1) 技能チェックシート

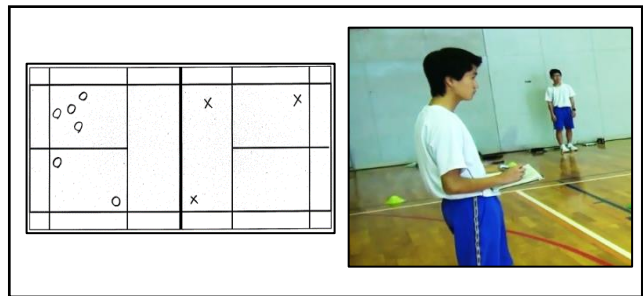
技能の動きの分解図が記されており、そのポイントを記入することができる。分析活動1において、技能のポイントを調べ、仲間と技能のポイントを検討していく段階で使用する【資料7】。



【資料7：技能チェックシート】

(2) 空間図 [バドミントン]

「どこに頻繁にストロークしているのか」や「どこの地点のシャトルを拾うことが苦手なのか」を視覚的に把握することができる。分析活動1において技を選択する段階、また、分析活動2において自己の課題を設定する段階で使用する。【資料8】



【資料8：空間図と空間図を記入している生徒の様子】

(3) タブレット端末

自己の動きを実際に見て、体の部分の動きを確認し、そのことを根拠にして自己の運動課題を把握することができる。分析活動2・3において、課題を設定する段階、技能の高まりを確認する段階で使用する。

【資料9】



【資料9：タブレット端末と自己の動きを確認している生徒の様子】

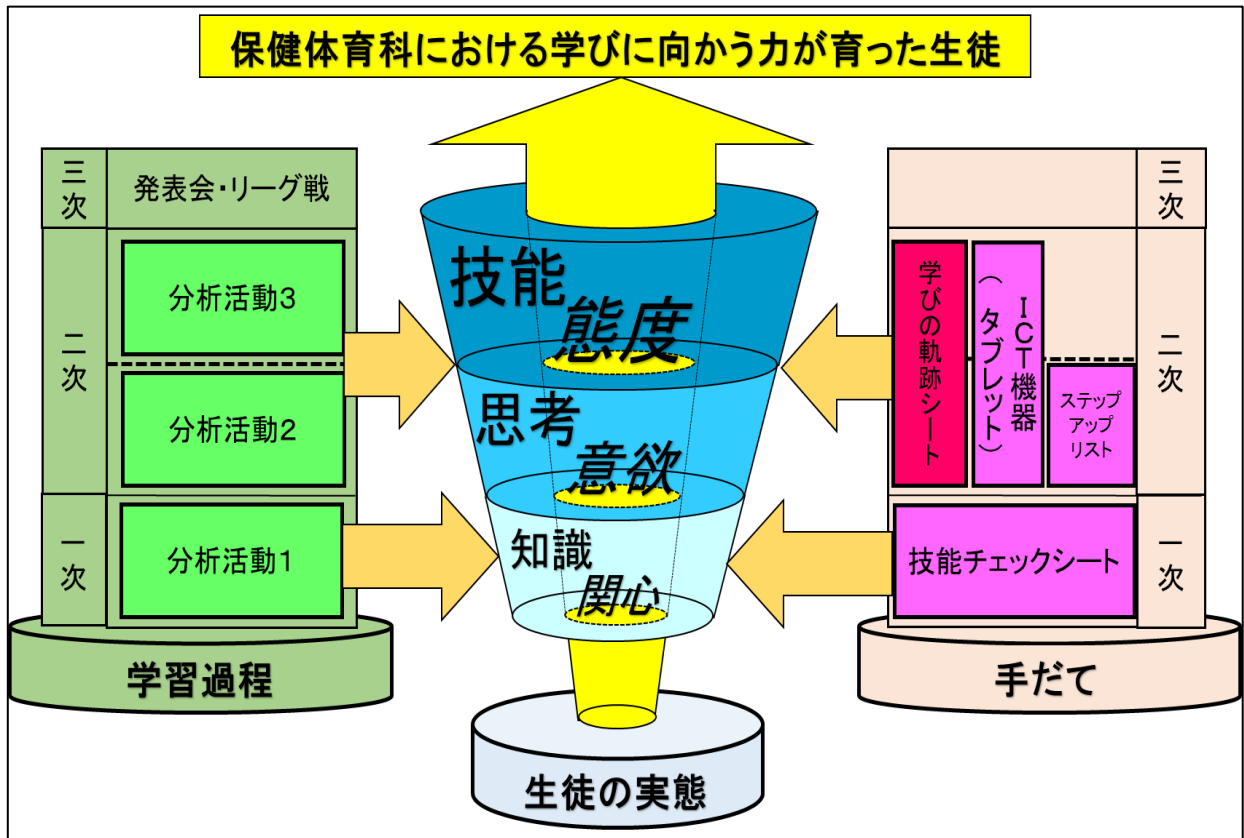
(4) ステップアップリスト (練習方法)

技能を習得するための方法が段階的に記されており、自分の課題に応じた練習方法を選択することができる。分析活動2において、自己の課題に応じた練習方法を選択するときや仲間と練習内容を検討するときに使用する【資料10】。

	課題例	練習方法	図
1	打つ体勢が作れない	スイングした後に定位置に戻って構える	
2	ラケットにシャトルが当たらない	吊るしたシャトルを打つ	
3	シャトルの軌道が安定しない	上段の目印とネットの間を通す	
3	狙った場所にシャトルを落とせない	かごを狙う	
4	ショットが安定しない	ラリーをする	

【資料10：マット運動とバドミントンのステップアップリスト（練習方法）】

2 研究構想図



3 仮説検証の内容と方法

(1) 検証の対象

宗像市立城山中学校 第3学年 4・5組男子 35名

(2) 検証の期間

平成28年9月～平成28年12月

(3) 検証の単元

実践Ⅰ 【B器械運動】 マット運動

実践Ⅱ 【E球技】 ネット型「バドミントン」

(4) 検証の内容と方法

	検証内容	検証方法	段階	判定基準
検証1	【検証1①】 運動の行い方に関する知識を身に付けることに有効であったか。	一次終了後にとったアンケートにおける「技能のポイント」の記述の内容の比較	A	自分が選択した技能において、1つの技能につき、異なる体の部位についてのポイントの記述が3つ以上ある。
			B	自分が選択した技能について、1つの技能につき、異なる体の部位についてのポイントの記述が2つある。
			C	A, B以外

	<p>【検証 1②】 「やってみたい」という関心をもつことに有効であったか。</p>	<p>診断的評価と一次終了後にとったアンケート結果の変容 質問項目 「できないことは、できるようになりたい」</p>	A	診断的評価と一次終了後にとったアンケートの差が+2ポイント以上、もしくは、5を選択している。
			B	診断的評価と一次終了後にとったアンケートの差が+1ポイント、もしくは、4を選択している。
			C	A, B以外
	<p>【検証 1③】 運動の行い方に関する知識を身に付け、「やってみたい」という関心をもつことに有効であったか。</p>	<p>検証 1①～検証 1②の総合判断を右のように設定</p>	A	AA
			B	AB BA BB
			C	A, B以外
検証 2	<p>【検証 2①】 運動の課題解決の見通しをもつことに有効であったか。</p>	<p>「学びの軌跡シート」における記述</p>	A	Bの基準に加え、新たな課題の気づきを記述している。
			B	運動の課題解決の見通しを、課題設定と練習方法の選択、具体的な体の動かし方を関連付けて振り返ることができている。
			C	A, B以外
	<p>【検証 2②】 「やっていこう」とする意欲をもつことに有効であったか。</p>	<p>「学びの軌跡シート」における記述</p>	A	授業の反省を踏まえ、解決策を講じて「できるようになる」「解決する」「頑張る」という思いを記述している。
			B	「できるようになる」「解決する」「頑張る」という思いを記述している。
			C	A, B以外
<p>【検証 2③】 運動課題解決の見通しをもち、「やっていこう」とする意欲をもつことに有効であったか。</p>	<p>検証 2①～検証 2②の総合判断を右のように設定</p>	A	AA	
		B	AB BA BB	
		C	A, B以外	
検証 3	<p>【検証 3①】 技能を高めることに有効であったか。</p>	<p>単元前と単元終了後の技能の変容</p>	A	領域により異なるので、「結果と考察」に明記する。
			B	
			C	

	<p>【検証 3②】 「またやろう」という次への期待感を高めることに有効であったか。</p>	<p>単元後の運動へのかかわりに関する記述</p>	A	Bの基準に加え、学習したことを他の場面でも活用していこうとする記述がある。
			B	運動に取り組む姿勢について、積極的に運動の機会を求めようとする記述がある。
			C	A, B以外
	<p>【検証 3③】 技能を高め、「またやろう」という次への期待感を抱くことに有効であったか。</p>	<p>検証 3①～検証 3②の総合判断を右のように設定</p>	A	AA
			B	AB BA BB
			C	A, B以外
<p>検証 4</p>	<p>保健体育科における学びに向かう力を育てることに有効であったか。</p>	<p>検証 1③, 2③, 3③の総合判断を右のように設定</p>	A	AAA AAB ABA BAA
			B	A, C以外
			C	CCC CCB CBC BCC

VI 研究の実際と考察

【実践 I】 全 10 時間（平成 28 年 9 月 27 日～10 月 21 日）

宗像市立城山中学校 第 3 学年 4・5 組（男子）

1 単元 【B 器械運動】 マット運動

2 目標

- マット運動の行い方に関する知識を身に付け、「やってみたい」という関心をもつことができる。
(知識・関心)
- マット運動の課題解決の見通しをもち、「やっていこう」とする意欲をもつことができる。
(思考・意欲)
- マット運動の技能を高め、「またやろう」という次への期待感を抱くことができる。
(技能・態度)

3 単元計画

		一次				二次					三次
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
学習の流れ	10	準備運動 めあて				準備運動 めあて					
	20	オリエンテーション	発展技の練習	選択した技の試技	分析活動 1	選択した3つの単技	巧技系の練習	組み合わせた技	演技会		
	30	既習技の試技		選択した技の撮影		分析活動 2	採点基準の確認	分析活動 2			
	40	条件を変えた技の練習	分析活動 1	〔ポイントの検討〕		練習	組み合わせた技	練習			
	50		〔3つの技の選択〕			〔選択した技のポイント調べ〕	分析活動 3	演技構成 演技練習 演技撮影 課題設定		分析活動 3	

4 指導の実際

一次 (1/10～4/10)

ねらい

マット運動の行い方に関する知識を身に付け、「やってみたい」という関心をもつことができるようにする。

生徒の活動の内容と教師の支援

一次では、始めに、オリエンテーションを行い、1・2年生で学習した技と、3年生で学習する技の一覧を生徒に示した【資料 11】。その技の中から、「自己に適した技を 3 つ『はじめなか-おわり』を選択し、構成して演技ができるようになるろう。」という単元のねらいを確認した。

その際、技能や体力の低い生徒も、意欲的に取り組むことができるように、体操日本代表の内村選手は、難度の高い技に挑戦するだけでなく、できる技の質を向上させることにも重点を置いているということを紹介し、できる技を滑らかに安定して行うこともマット運動では大切なことであることを説明した。最後に、生徒が目標を自己決定することができるように、組み合わせた技を滑らかに安定して構成している上級者のモデルのVTRを視聴した。

次に、自分のもち技を確認するために試技を行い、条件を変える方法について学習した。【資料12】は生徒に配布した学習カードである。このカードには、マット運動の技が記載されており、「滑らかに安定してできる」技には「○」、「だいたいできる」技には「△」、「できない、やったことがない」技には「×」を記入する欄が設けられている。この活動を通して、自分のもち技を確認した。また、基本的な技に条件を変える方法の一例を掲示物で確認した【資料13】。そして、グループに分かれて練習を行った。さらに、発展技である「伸膝前転」「伸膝後転」「後転倒立」「ロンダート」「前方倒立回転跳び」「跳び前転」の技の習得を行った。

【分析活動1】

分析活動1では「やってみたい」「より高めたい」と思った技を3つ選択し、その技の試技を行った。【資料14】は、ある生徒が選択した技である。この生徒は、開脚前転はできるが、伸膝後転については膝が曲がるという課題、前方倒立回転跳びについては着地がうまくできないという課題があり、これらの課題を解決したいという思いから技を選択していた。このように、生徒たちは、自己の目標をもって選択していた。

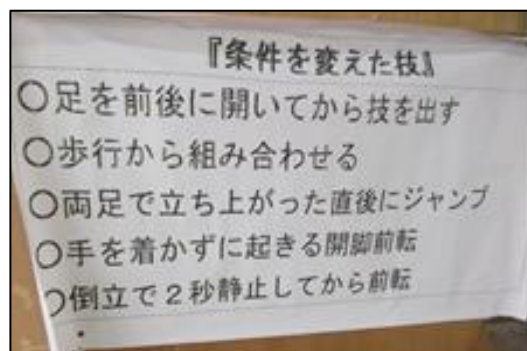
次に、生徒たちは、選択した技のポイントを調べ、技能チェックシートに書き込んだ。最後に、同じ技を選択した仲間とグループを組み、自分の考えた技のポイントを付箋紙に書き込み、全体の技能チェックシートに貼り付け、自分の考えた技のポイントと仲間が考えた技のポイントを検討した(相互評価)【資料15】。そして、仲間の考えから、自分が気付かなかった技のポイントを自分の技能チェックシートに付加修正した【資料16】。その際、教師は、生徒たちが技能のポイントを的確に捉えられているか確認を行った。

系	群	グループ	技の難易度		
			A難度 (2点)	B難度 (3点)	C難度 (4点)
回転系	接転	前転	●前転 ●開脚前転	●倒立前転 ●跳び前転	●伸膝前転 ●跳び伸膝前転
		後転	●後転 ●開脚後転	●伸膝後転	●後転倒立
	倒立回転	●ブリッジ	●側方倒立回転	●ロンダート ●跳び側方倒立回転	
ほん転	倒立回転跳び	●倒立ブリッジ	●前方倒立回転	●前方倒立回転跳び	
	はねおき	●頭はねおき	●首はねおき		

【資料11：技の一覧と難度】

系	群	グループ	技名
回転系	接転技	前転	前転()、開脚前転()、伸膝前転()、跳び前転()、倒立前転()
		後転	後転()、開脚後転()、伸膝後転()、後転倒立()
	倒立回転	側方倒立回転()、前方倒立回転()	
ほん転技	はねおき	首はねおき()、頭はねおき()	
	前転跳び	前方倒立回転跳び()、ロンダート()	

【資料12：学習カード】



【資料13：条件を変える方法】



【資料14：技の選択】

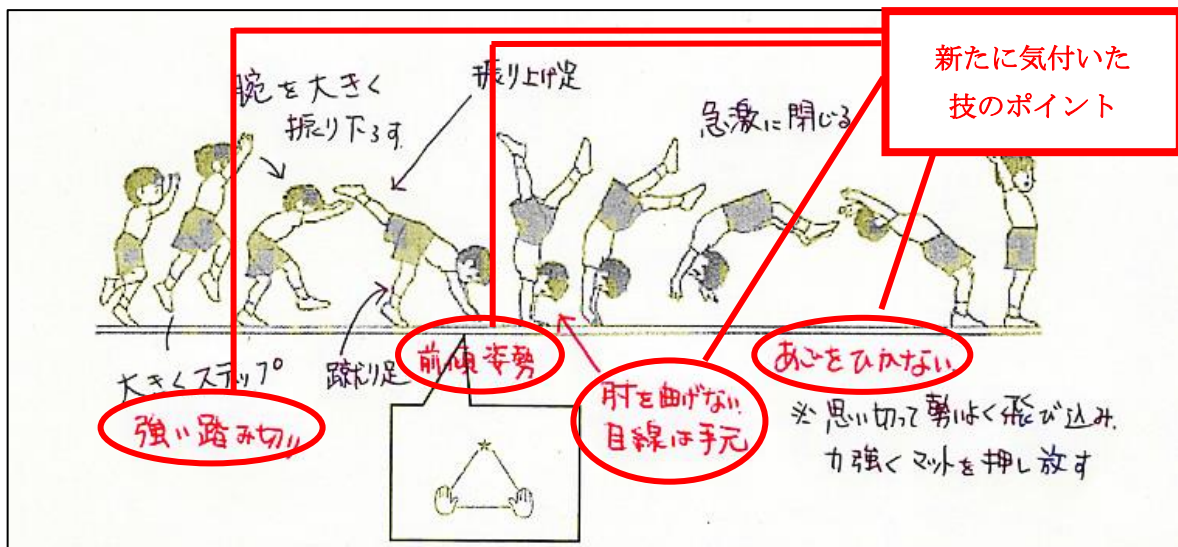


【資料 15：技のポイントを検討している様子】



【資料 16：技能チェックシートを付加修正している様子】

【資料 17】は前方倒立回転跳びを選択したある生徒の技能チェックシートである。この生徒は、自分が考えた前方倒立回転跳びのポイントと、仲間が考えたポイントを検討することで、「強い踏み切りが必要」「前傾姿勢になる」「肘を曲げない」「あごをひかない」というポイントに新たに気付くことができた。



【資料 17：技能チェックシートに付加修正したある生徒の記述（前方倒立回転跳び）】

二次 (5/10～9/10)

ねらい

マット運動の課題解決の見通しをもって「やっていこう」とする意欲をもち、技能を高めて「またやろう」という次への期待感を抱くことができるようにする。

生徒の活動の内容と教師の支援

選択した技 2 【前方倒立回転跳び】

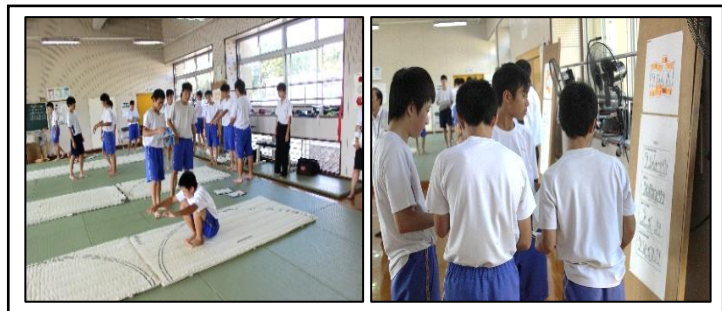
学習到達度リスト	課題の優先順位	課題解決のための具体的な体の動かし方・使い方	練習方法	課題の達成 (○・×)	【学びの振り返り】 なぜ、技能が高まったのか、または、技能が高まらなかったのかを課題設定や練習方法の選択の面から振り返ろう
1 着手中、肘が曲がっていた。 着地の時に、膝が曲がっていた。 着地の時に手が足元にあった。	1 3 2	1 手を見 2 手で強くなつと抑 3 手を回転中に上げると。	3 1 1	○ × ○	【学びの振り返り】 なぜ、技能が高まったのか、または、技能が高まらなかったのかを課題設定や練習方法の選択の面から振り返ろう 前時に、肘が曲がっていたのは、課題：かばってアゴをかさてて思ってた。着地時にも膝が曲がっていたのは、回転が足りなかったと思っで、手で強くなつと抑し回転させた。着地の時に手が足元にあつた。手を動かさなかったからだと思うで、手を回転中に上げると、アゴがさつて来た。回転は肘が伸びて完成してしまつたが、回転も最後はもう少し上げたいので、インターネットなどで調べて観察しようと思つた。
	3	4	5	6	
2 手が最後まで残ってしまう。		手を見つめる。	1	○	

☆新たな課題を再設定する場合

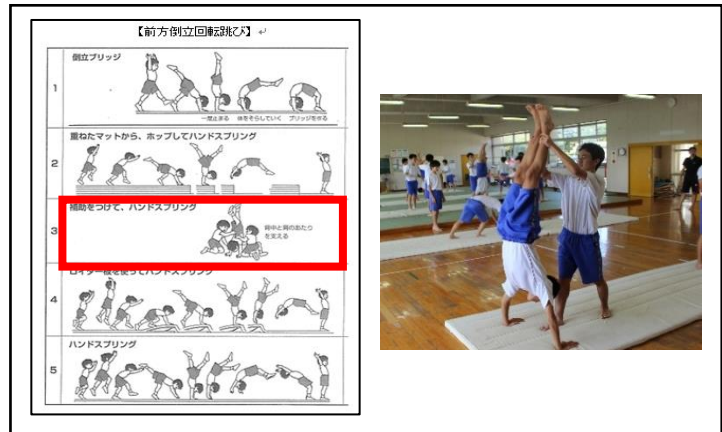
【資料 18：前方倒立回転跳びを選択したある生徒の学びの軌跡シート】

【分析活動 2】

二次では、まず、自己の試技をタブレットで視聴して確認し、課題を設定した。【資料 18】は、前方倒立回転跳びを選択したある生徒の「学びの軌跡シート」である。この生徒は、①「着手中、肘が曲がっていた」「着地の時に、膝が曲がっていた」「着地の時に手が足元にあった」という 3 つの課題を設定した。また、適切な課題を設定しているかについてグループの仲間と見合った際に、「手が最後まで残ってしまう」ということをグループの仲間から指摘されたので、課題を追加し、②の場所に記入した。次に、この生徒は、③「着手中、肘が曲がっていた」という課題を最優先に考え、④「手元を見る」ことを意識



【資料 19：仲間の試技を見て優先順位、練習方法、具体的な体の動かし方を検討している様子】



【資料 20：ステップアップリストから選択した練習をしている様子】

して、**5**「補助をつけてハンドスプリングをする」という練習方法を選択し、肘を伸ばす練習を行った。**【資料 19】**は、仲間の試技を見て優先順位、練習方法、具体的な体の動かし方を検討している様子である。**【資料 20】**は、ステップアップリストから練習方法を選択し、補助をつけてハンドスプリングの練習をしている様子である。教師は**4**の具体的な体の使い方の部分を記入することに戸惑っているグループに、具体的にどのようなことに困っているかを聞き出し、その内容に沿った具体的なアドバイスを送った。

【分析活動 3】

自己の演技の映像を視聴し、技能の高まりを確認した。次に、グループで各自の技能の高まりを確かめ合い、評価を記入した**【資料 21】**。この生徒は、**6**にあるように、4つの課題に対して3つの課題を解決することができた。さらに、最後に「学びの軌跡シート」を見返して「学び方の振り返り」を記入した。この生徒は、**7**「着



【資料 21：技能の高まりを確認し、評価を記入している様子】

手中に肘が曲がっていたのは、腕に力が入っていたから」と分析しており、技能が高まった要因を明らかにしている。また、「着地の時に膝が曲がっている」という課題が解決できていないことに対して、着地の時に膝が伸びているイメージをつかむために、「インターネットを使って観察しようと思う」という次の授業への期待感をもつことができている。技能の成否の原因をうまくつかめていない生徒には、教師が練習方法や具体的な体の動かし方がどうであったかを確認しながら「学びの振り返り」を行った。

【資料 22】は、「技能の知識を仲間とともに深め、課題解決に向けて練習に取り組む際に、解決すべき課題の優先順位を決め、練習方法や具体的な体の動かし方について、グループの仲間と検討し、決定したことは、あなたにとって、授業で、どのように活かされましたか」という問いに対するある生徒の記述である。このように生徒たちは、運動の行い方に関する知識を仲間とともに深め、課題解決に向けて練習に取り組む際に、解決すべき課題の優先順位、練習方法や具体的な体の動かし方について、グループの仲間と検討し、決定したことで、技能を高めることができるということに気付いている。

これまでやってきた授業の内容を振り返ることで技能を高めることができた。

【資料 22：マット運動の取り組み方を振り返ることの大切さに気付いた生徒の記述】

また、巧技系の技の練習、自らの意志で選択した3つの技を組み合わせた練習においても、分析活動 2・3 を行い、演技会に向けて練習を行った。

三次 (10/10)

ねらい

学んだことを発揮して、演技会を楽しむことができるようにする。

生徒の活動の内容と教師の支援

三次では、これまで学習してきたことを発揮することができるように、グループごとに演技会を行った。演技会では、生徒たち自身で採点することができるように、「腕と膝の伸びを確認する」「静止とぐらつきを確認する」「技と技のつなぎ部分を確認する」という役割をもち、各自が責任をもって演技会に取り組んだ【資料 23】。【資料 24】は、演技会終了後のある生徒の感想である。この記述からわかるように、マット運動の授業で学んだこと（技のポイント



【資料 23：演技会の様子】

を調べることを、課題を設定すること、技のポイントを意識しながら練習すること）を活かして、今後もマット運動を続けて難しい技に挑戦したいという期待感を抱いている様子が伺える。

僕はこれからマット運動をしていこうと思います。
まず技のポイントを調べて、これを注意しながら、
1度やってみて自分の課題を見つけ、これを克服するために他の人の技を観察し、
技のポイントを意識しながら練習していこうと思います。
そしてもっと難しい技をやってみようと思います。

【資料 24：単元終了後の生徒の感想】

5 結果と考察

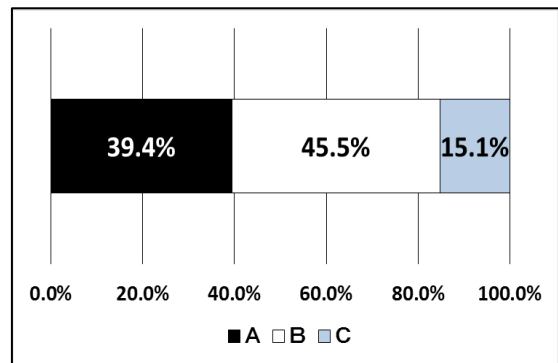
検証 1① 分析活動 1 は、マット運動の技の行い方に関する知識を身に付けることに有効であったか。

検証 1①については、総括的評価における「技能のポイント」の記述内容を分析し、以下のABCの三段階で判定を行った。

ロンドート	勢いをつけて本気で着手。両手で強く押し込み、足をしっかり着地		
	体について	手について	足について

【資料 25：Aと判断した技のポイントについての記述例】

A	自分が選択した技において、1つの技につき、異なる体の部位についてのポイントの記述が3つ以上ある。
B	自分が選択した技において、1つの技につき、異なる体の部位についてのポイントの記述が2つある。
C	A, B以外



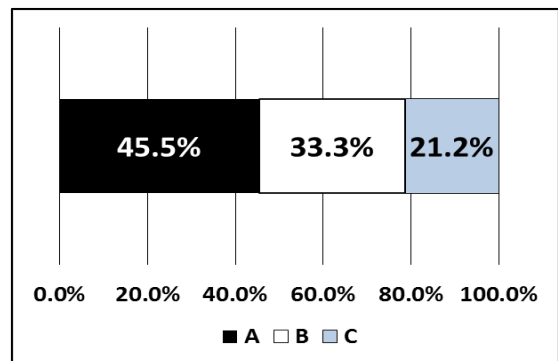
【資料 26 : 検証 1①の検証結果】

検証 1② 分析活動 1 は、マット運動を「やってみたい」という関心をもつことに有効であったか。

検証 1②については、診断的評価と一次終了後のアンケートの差を比較し、以下のABCの三段階で判定を行った。ここでいうポイントとは5段階評価尺度(5:当てはまる 4:やや当てはまる 3:どちらでもない 2:あまり当てはまらない 1:当てはまらない)のことである。

アンケート項目・できないことは、できるようになりたい。(知的好奇心)

A	診断的評価と一次終了後のアンケートの差が+2ポイント以上、もしくは、5を選択している。
B	診断的評価と一次終了後のアンケートの差が+1ポイント、もしくは、4を選択している。
C	A, B以外



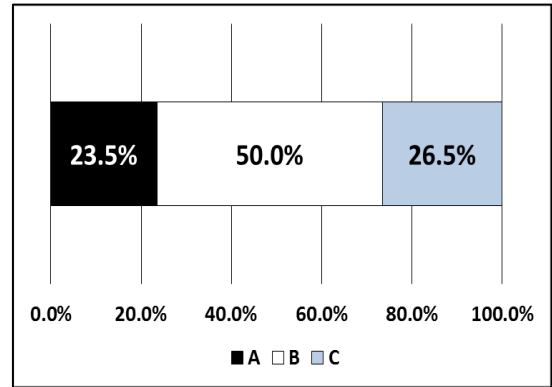
【資料 27 : 検証 1②の検証結果】

検証 1③ 分析活動 1 は、マット運動の知識を身に付け、「やってみたい」という関心をもつことに有効であったか。

検証 1③は、検証 1①と検証 1②を総合的に判断して、以下のABCの三段階で判定を行った。

A	AA
B	AB BA BB
C	A, B以外

検証1③の結果、Aは23.5%、Bは50.0%、Cは26.5%であった【資料28】。この結果より、C判定の割合が26.5%あることから、分析活動1は、マット運動の知識を身に付け、「やってみたい」という関心をもたせることに、あまり有効に働かなかつたと考える。「より高めたい」技を選択し、その選択した技のポイント調べて、同じ技を選択した生徒とその技のポイントについて検討し合い、知識を身に付けることで関心を高めることをねらったが、それだけでは不十分であり、生徒たちに必要感をもって技を選択する手だてが必要だったと考える。また、仲間と技のポイントを検討する活動でも、単に調べたポイントを付箋紙に書いて出し合い、自分に不足している内容を記入するだけでなく、技を選択した全員がイメージできる言葉に直したり、実際に体を動かしてポイントを確認したりしてグループ活動(相互評価)を充実させることで、知識の習得を促すことができるのではないかと考える。



【資料28：検証1③の検証結果】

検証2① 分析活動2と分析活動3は、マット運動の課題解決の見通しをもつことに有効であったか

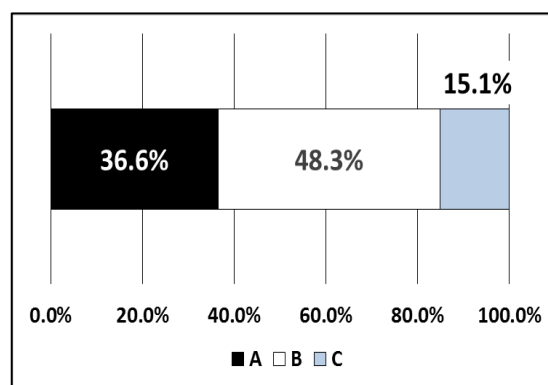
検証2①については、「学びの軌跡シート」における記述を分析し、以下のABCの三段階で判定を行った。

Handwritten notes with red annotations:

- 課題 (Topic): 体をマットスタート地点もどる = とかでできた
- 練習方法 (Practice Method): のは、まず回転を練習して、回転の練習をしたら、そして回転中にマットを見て
- 新たな気づき (New Discovery): いるので、まず、まわるとかでできた
- 具体的な体の動かし方 (Specific body movement method): 思います。両手でつかおして下から着地

【資料29：Aと判断したマット運動の取り組み方についての記述例】

A	Bの基準に加え, 新たな課題への気付きを記述している。
B	マット運動の取り組み方を, 課題設定と練習方法の選択, 具体的な体の動かし方を関連付けて振り返ることができている。
C	A, B以外



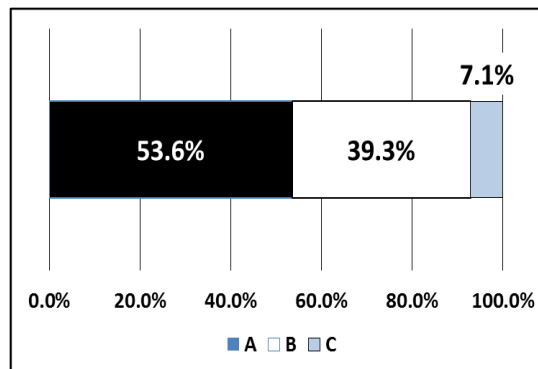
【資料 30 : 検証 2①の検証結果】

検証 2② 分析活動 2 と分析活動 3 は, マット運動を「やっていこう」とする意欲をもつことに有効であったか。

検証 2②については, 「学びの軌跡シート」の記述内容を分析し, 以下のA B Cの三段階で判定を行った。

【資料 31 : Aと判断した具体的な見通しを記述している記入例】

A	授業の反省を踏まえ, 解決策を講じて「できるようになる」「解決する」「頑張る」という思いを記述している。
B	「できるようになる」「解決する」「頑張る」という思いを記述している。
C	A, B以外



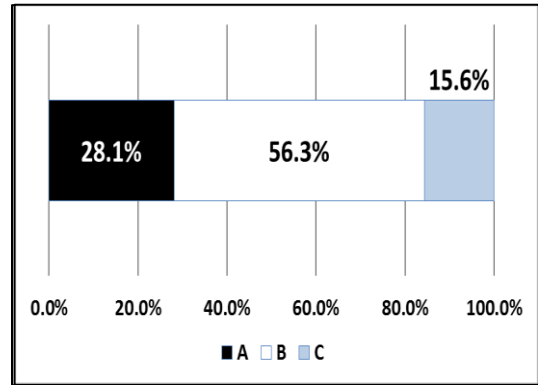
【資料 32 : 検証 2②の検証結果】

検証 2③ 分析活動 2 と分析活動 3 は, マット運動の課題解決の見通しをもち, 「やっていこう」とする意欲をもつことに有効であったか。

検証 2③については, 検証 2①と検証 2②を総合的に判断して, 以下のA B Cの三段階で評価を行った。

A	AA
B	AB BA BB
C	A, B以外

検証 2③の結果、Aは 28.1%、Bは 56.3%、Cは 15.6%であった【資料 33】。この結果より、分析活動 2 と分析活動 3 は、マット運動の課題解決の見通しをもち、「やっぴいこう」とする意欲をもつことにおおむね有効であったと考える。検証 2①においてA判定の生徒 11 人のうち検証 2②でA判定の生徒は 8 人、検証 2①においてC判定の生徒 2 人のうち検証 2②でC判定の生徒は 2 人だったことから、マット運動の課題解決の見通しをもつことが、意欲をもって課題解決に向かうことに影響したと思われる。C判定の割合が 15.6%あり、課題を解決していくための過程を仲間と検討しながら順序立てて記入していくときに、優先順位までは記入できていたが、それ以降の練習方法や具体的な体の使い方の部分を記入することができていない生徒がいた。このことが検証 2①と検証 2②の両方においてC判定であった要因であると考えられるので、学びの軌跡シートと技能チェックシート、ステップアップリストの関係性を生徒に明確に提示し、課題の解決の見通しをもてるようにする必要がある。



【資料 33 : 検証 2③の検証結果】

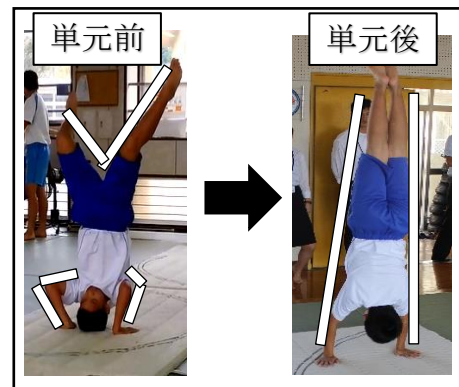
検証 3① 分析活動 2 と分析活動 3 は、マット運動の技能を高めることに有効であったか。

検証 3①については、分析活動後の技能を分析し、以下のABCの三段階で判定を行った。得点については、各技のもち点を設定している【資料 11】。その技に対して、「腕と膝の伸び」「静止とぐらつき」「技と技のつなぎ部分」で判定し、1つの減点につき-0.5として計算している【資料 34】。

【資料 35】は、単元始めと単元終わりの、ある生徒の倒立前転である。この生徒は、「腕と膝の伸び」「静止とぐらつき」の減点がなく、倒立前転の持ち点である3点を獲得している。

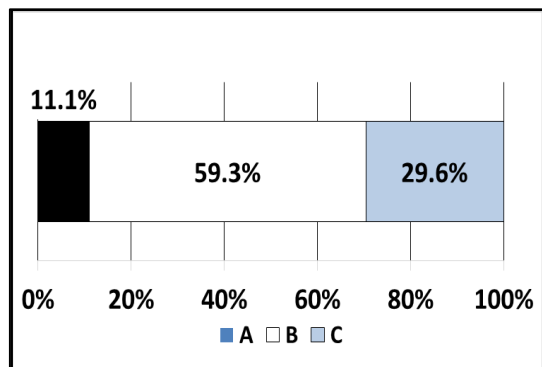
	(巧技系) 平均立ち	はじめ	(巧技系) なか	なか	(巧技系) おわり	おわり	合計
技名	手足正位平均立ち	倒立前転	ジャンプ倒立	前倒立回転跳び	ジャンプ倒立	バック	
技の難度点	2	3	4	4	3	4	17
腕・膝の伸び	○	○	○	○	○	○	
静止 ぐらつき	○	○	○	○	○	○	
技と技の つなぎ部分	○		○		○		
最終得点 (難度点-【×】×0.5)	2	2.5	4	3.5	3	3.5	15.5

【資料 34 : 採点表】



【資料 35 : 減点なしの例】

A	演技会における技能の得点が、20 ポイント以上である
B	演技会における技能の得点が、15 ポイント以上である。
C	A, B以外



【資料 36 : 検証 3①の検証結果】

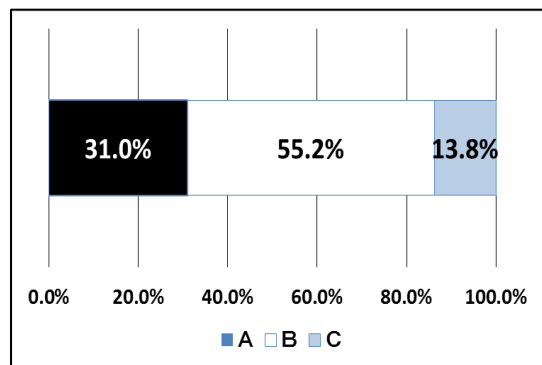
検証 3② 分析活動 2 と分析活動 3 は、マット運動を「またやろう」という次への期待感を抱くことに有効であったか。

検証 3②について、運動へのかかわりに関する記述を分析し、以下の A B C の三段階で判定した。

10時間のマット運動の授業で課題をみつけ、丁寧に解決することを知りました。また課題を解決できると楽しくなりました。前はできなかった校ができた、友達と教えあ、たりする時は特に楽しかったです。先生がおっしゃっていたように、自分はマット運動を高校で習うかもしれないし、しないかもしれませんが、しかし、マット運動で学んだことを勉強や高校生活でいかして楽しく取り組むことができると思っています。自分の課題を見つけ、解決方法を調べたり、友達と話し合、たりして課題を解決するこのマット運動で学んだことを取り組むことでマット運動に楽しく取り組んでいこうと思っています。ありがとうございました！

【資料 37 : A と判断した次への期待感を記述している生徒の記述例】

A	Bの基準に加え、学習したことを他の場面でも活用していこうとする記述がある。
B	運動に取り組む姿勢について、積極的に運動の機会を求めようとする記述がある。
C	A, B以外



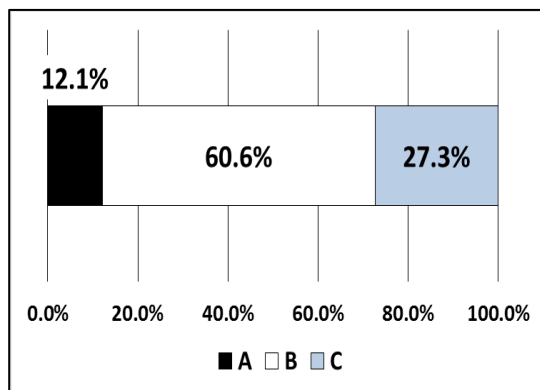
【資料 38 : 検証 3②の検証結果】

検証 3③ 分析活動 2 と分析活動 3 は、マット運動の技能を高め、「またやろう」という次への期待感を抱くことに有効であったか。

検証 3③については、検証 3①と検証 3②を総合的に判断して、以下のABCの三段階で評価を行った。

A	AA
B	AB BA BB
C	A, B以外

検証 3③の結果、Aは12.1%、Bは60.6%、Cは27.3%であった【資料 39】。この結果より、C判定の割合が27.3%あることから、分析活動 2 と分析活動 3 は、マット運動の技能を高め、「またやろう」という次への期待を抱くことにあまり有効に働かなかったと考える。今回、技能の高まりがあまり見られなかった要因としては、ステップアップリストを使って課題に応じた練習方法を選択したが、そのステップアップリストに記載されている練習方法だけでは自分の課題を解決することに不十分であったと考えられる。今後は、ステップアップリストの内容を精査し、一人一人の課題に応じた練習方法にしていく必要がある。また、課題に応じた練習を選択することができても、その練習場所において、具体的に何を意識しながら練習すればよいか明確にならなかった生徒が見られた（学びの軌跡シートの具体的な体の動かし方の部分に未記入の生徒が多かった）。今後は、技能チェックシートで何を修正すればよいかを明確にし、優先順位や練習方法、具体的な体の動かし方を検討し合う活動を充実する必要がある。



【資料 39 : 検証 3③の検証結果】

しかし、検証 3①でC判定の生徒 8 人のうち、検証 3②においてもC判定の生徒は 2 人と少なく、技能が高まらなかったにもかかわらず、次への期待感をもった生徒は多かった。これは、今回、運動課題を自分の判断だけでなく、仲間との相互評価で丁寧に設定し、さらに技能の高まりを仲間と相互評価する活動を設定したことで、最終的な技自体ができなくても学習の過程で運動課題を解決できた達成感を味わうことができたからではないかと考える。

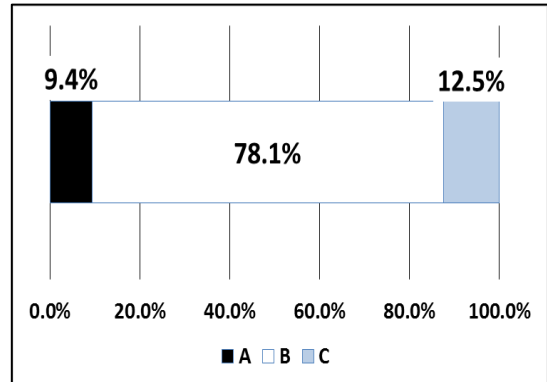
よって、技能の高まりを相互評価する活動で、仲間の上達した点を見ようとする意識をさらに高めていきたい。

検証 4 「学びの軌跡シート」を活用した 3 つの分析活動は、保健体育科における学びに向かう力を育てることに有効であったか。

検証 4 については、検証 1③と検証 2③、検証 3③を総合的に判断して、以下のABCの三段階で判定を行った。

A	AAA AAB ABA BAA
B	A, C以外
C	CCC CCB CBC BCC

検証4の結果、Aは9.4%、Bは78.1%、Cは12.5%であった【資料40】。この結果から「学びの軌跡シート」を活用した3つの分析活動は、保健体育科における学びに向かう力を育てることにおおむね有効であったと考える。しかし、マット運動を「やってみたい」という関心をもつこと、運動の技能を高めることに課題が残ったので、手だてを改善する必要があると考える。



【資料40：検証4の検証結果】

6 成果と課題

(1) 実践Iの成果

- 課題を自己決定し、解決すべき課題の優先順位、練習方法や具体的な体の動かし方について、グループの仲間と検討し、決定したことで、マット運動の課題解決の見通しをもち、意欲的に課題解決に向かうことができた。

(2) 実践Iの課題

- 分析活動1において、必要感をもって関心を抱かせる手だてを検討する必要がある。
- 分析活動3において、一人一人の課題に応じた練習方法が選択できるように、ステップアップリストの内容を精査する必要がある。また、課題に応じた練習を選択することも、その練習場所において、具体的に何を意識して練習すればよいか曖昧な生徒が見られた。(学びの軌跡シートの具体的な体の動かし方の部分に未記入の生徒が多かった)。今後は、技能チェックシートで何を修正すればよいかを明確にし、優先順位や練習方法、具体的な体の動かし方を検討し合う活動を充実する必要がある。

【実践Ⅱ】 全9時間（平成28年11月1日～12月2日）
 宗像市立城山中学校 第3学年4・5組（男子）

1 単元 【E球技】 ネット型 「バドミントン」

2 目標

- バドミンントンの行い方に関する知識を身に付け、「やってみたい」という関心をもつことができる。 (知識・関心)
- バドミンントンの課題解決の見通しをもち、「やっていこう」とする意欲をもつことができる。 (思考・意欲)
- バドミンントンの技能を高め、「またやろう」という次への期待感を抱くことができる。 (技能・態度)

3 単元計画

		一次			二次				三次		
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	
学習の流れ	10 20 30 40 50	準備運動 めあて		分析活動1	準備運動 めあて				リーグ戦		
		オリエンテーション	シャトル投げゲーム		選択した3つのフライト		戦術				
		オーバーヘッドストローク	アンダーハンドストローク		分析活動2						
			フライトの確認		ゲーム						
		試しのラリー	ゲーム		分析活動3						

4 指導の実際

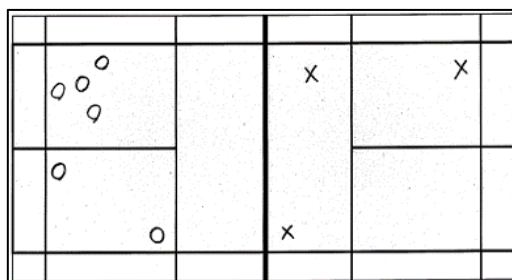
一次 (1/9～3/9)

ねらい

バドミンントンの行い方に関する知識を身に付け、「やってみたい」という関心をもつことができるようにする。

生徒の活動の内容と教師の支援

一次では、始めに、オリエンテーションを行い、「空いた場所を攻撃したり、空いている場所を作りだしたりするゲームができるようになる」という単元のねらいを確認した。また、強いストローク（スマッシュ）を打つだけが試合に勝つ方法ではなく、空いた場所を攻撃したり、空いている場所を作りだして攻撃したりすることも必要であることを理解することができるように、リオデジ



【資料41：空間図】

ャネイロオリンピック日本代表の佐々木翔選手の試合のVTRを視聴した。その際、空いた場所に攻撃したり、空いている場所を作りだしたりするイメージをつかむことができるように、教師が佐々木翔選手のVTRを見ながら空間図を記入し、それを提示した【資料41】。

次に、力強くスイングしてラケットのミート面で正確にシャトルを捉えることができるように、オーバーヘッドストロークのフォームを確認し、練習を行った。また、オーバーヘッドストロークの技能の高まりを確認することができるように、「オーバーヘッドストロークの押し相撲」を行った【資料42】。「オーバーヘッドストロークの押し相撲」とは、コートに1対1で入り、相手をコートのエンドラインまで押し出すゲームである。これを行うことによって、ラケットのミート面を意識し、力強くスイングすることをねらった。また、相手コートの空いている場所を狙ったり、次の動きへの準備姿勢を整えたりすることができるように、シャトル投げゲームを行った【資料43】。シャトル投げゲームとは、ラケットを持たずに、シャトルを相手コートに投げ合い、得点を競い合うゲームである。さらに、ゲームの開始時に使うフライトを身に付けることができるように、アンダーハンドストローク（サービス）のフォームの確認を行い、練習を行った。最後に、「ハイクリア」「ドロップ」「ロブ」「ヘアピン」「スマッシュ」のシャトルの軌道の確認を行った。ここでは、オーバーヘッドストロークとアンダーハンドストロークの「シャトルを打つ場所」「相手コートにシャトルを落とす場所」「シャトルの軌道」を変えるとフライトの名称が変わることを理解できるように、フライトの軌跡図の掲示物で確認し【資料44】、試し打ちを行った。

「ヘアピン」「スマッシュ」のシャトルの軌道の確認を行った。ここでは、オーバーヘッドストロークとアンダーハンドストロークの「シャトルを打つ場所」「相手コートにシャトルを落とす場所」「シャトルの軌道」を変えるとフライトの名称が変わることを理解できるように、フライトの軌跡図の掲示物で確認し【資料44】、試し打ちを行った。

【分析活動1】

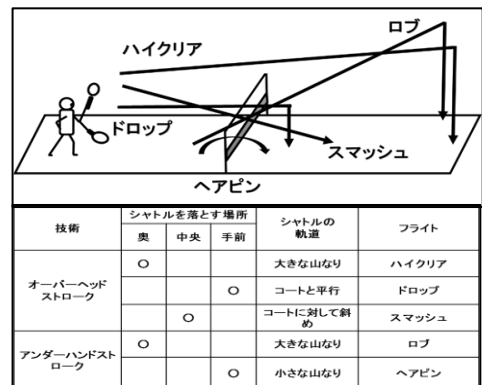
分析活動1では、始めに、ゲーム中に自分がどの場所に打つことが多いかを把握することができるように、グループの仲間が空間図を記入した【資料45】。また、ゲームで勝つためには、どのフライトを身に付けないといけないかを考え、「コートの奥に打つフライト（ハイクリア、ロブ）」から一つ、「ネット際に打つ技能（ヘアピン、ドロップ）」、事前アンケートにお



【資料42：オーバーヘッドストロークの押し相撲の様子】



【資料43：シャトル投げゲームの様子】



【資料44：フライトの軌跡図の掲示物】



【資料45：空間図を記入している様子】

いて、生徒が身に付けたいという思いが強かった「鋭い打ち（スマッシュ）」の合計3つのフライトを選択した。次に、そのフライトの行い方のポイントを調べ、技能チェックシートに具体的な体やラケットの使い方を書き込んだ。最後に、グループの中で自分の考えたフライトの行い方のポイントを付箋紙に書き込み、全体の技能チェックシートに貼り付け、自分が考えたフライトの行い方のポイントと仲間が考えたフライトの行い方のポイントを検討した（相互評価）。そこで、仲間の考えから、自分が気付かなかったフライトの行い方のポイントを自分の技能チェックシートに付加修正した【資料46】。教師は、生徒が作成した技能チェックシートの中から、技能のポイントを的確に捉えたものを選び、模範例として生徒に提示した。生徒たちは、ポイントのを見つけ方やまとめ方の参考とし、自分の技能チェックシートを完成させていた。



【資料46：技能チェックシートを付加修正している様子】

【資料47】はドロップを選択した、ある生徒の技能チェックシートである。この生徒は、自分が考えたドロップのポイントと、仲間が考えたポイントを検討することで、「半身の姿勢」「落下点に入る」「打点はハイクリアよりやや上」「面と角度」「ひねり」というポイントに新たに気付くことができた。



【資料47：技能チェックシートに付加修正したある生徒の記述（ドロップ）】

二次 (4/9～7/9)

ねらい

バドミントンの課題解決の見通しをもって、「やっ払いこう」とする意欲をもち、技能を高めて、「またやろう」という次への期待感を抱くことができるようにする。

生徒の活動の内容と教師の支援

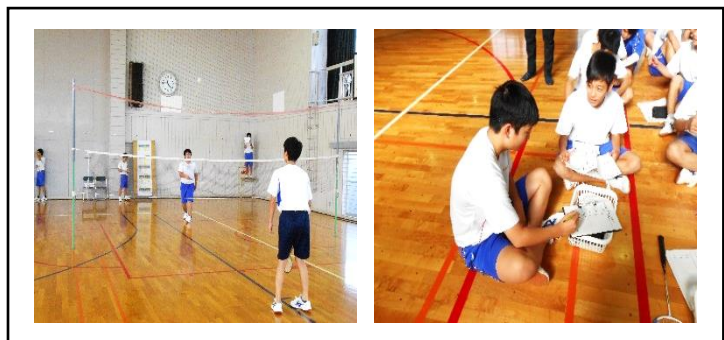
1	学習到達度リスト	課題の優先順位	練習方法	課題解決のための具体的な体の動かし方・使い方	課題の達成 (○・×)	【学び方を振り返ろう】 次の視点から学び方を振り返ろう ○課題設定 ○練習方法の選択 ○課題解決
	右足に体重を乗せ、左手でバランスをとる。	2	1	足の使いかた	○	シャトルを打つ強さが強すぎたり弱すぎたりという課題に対して、力を狙う練習をした。たぶんドロップの時の力の調節ができていないように感じた。そして新たに、体重移動ができていないという課題ができた。その原因は、意識する部分が変わって、打った後に、定位置に戻れていないからだ。これを今後改善したい。試合の状況に応じて技ができていない。
	あまり力を入れず、スナップを使う。	3	5	手首のスナップ	○	
	ラケットを打つタイミングが悪い。	4	2	腕の使いかた	○	
		3	4	5	6	
★新たな課題を再設定する場合						
2	学習到達度リスト	優先順位	練習方法	課題解決のための具体的な体の動かし方・使い方	課題の達成 (○・×)	7
	シャトルを打つ強さが強すぎたり弱すぎたりしている。	1	5	腕と手首	○	
	シャトルを上に打ちすぎている。	5	5	手首のスナップ	○	
	体重移動ができていない。			足の使いかた	×	

【資料 48：ドロップを選択した、ある生徒の学びの軌跡シート】

【分析活動 2】

二次では、まず、自己のストロークを空間図とタブレットを視聴して確認し、課題を設定した。

【資料 48】は、「ドロップ」を選択したある生徒の「学びの軌跡シート」である。この生徒は、①「右足に体重を乗せ、左手でバランスをとる」「あまり力を入れず、スナップを使う」「ラケットを打つタイミングが悪い」という課題を設定した。次に、適切な課題が設定してあるかをグループの仲間と見合った際に、「シャトルを打つ強さが強すぎたり弱すぎたりしている」「シャトルを上に打ちすぎている」ということをグループの仲間から指摘されたので、課題を追加し、②の場所に記入した。この生徒は、仲間が指摘した③「シャトルを打つ強さが強すぎたり弱すぎたりしている」という課題を最優先に考え、⑤「腕と手首」を意識して、④「ネットとネット上に張られた紐の間にシャトルを打ち、「ラリーを続ける」



【資料 49：仲間のフライトを見て優先順位、練習方法、具体的な体の動かし方を検討している様子】

課題例	練習方法	図
打つ体勢が作れない	スイングした後に定位置に戻って構える	
ラケットにシャトルに当たらない	吊るしたシャトルを打つ	
シャトルの軌道が定まらない	上段の目印とネットの間を通す	
狙った場所にシャトルを落とせない	かごを狙う	
ショットが安定しない	ラリー ※ドロップはロブで打ち過ぎ	

【資料 50：練習方法を見て、課題解決に向けて練習している様子】

という練習方法を選択した。【資料 49】は仲間のフライトを見て優先順位、練習方法、具体的な体の動かし方を検討している様子である。【資料 50】は、練習方法を選択し、課題解決に向けて練習している様子である。教師は、学びの軌跡シートを記入している生徒のもとに行き、課題を解決する手順を確認すると同時に優先順位や練習方法を選択した理由等を聞いたり、作成に戸惑っている生徒にアドバイスを送ったりした。

【分析活動 3】

自己の演技の映像を視聴し、技能の高まりを確認した。次に、グループで各自の技能の高まりを確かめ合い、評価を記入した【資料 51】。この生徒は、**6**にあるように、6つの課題に対して5つの課題を解決することができた。さらに、バドミントンの取り組み方を明らかにするために、**7**の場所に学び方の振り返りを記入した。この生徒は、



【資料 51：技能の高まりを確認し、評価を記入している様子】

「シャトルを打つ強さが強すぎる」という課題に対して「ラリーを続ける」という練習以外にも、ネット近くに置かれた「かごを狙う」という練習をすることで、力の調整ができるようになったと分析している。また、その練習の中で、新たに「体重移動ができていない」という課題を仲間から指摘されている。この生徒は、この課題を解決して、「試合で状況に応じた技ができるようになりたい」という期待感をもつことができています。

【資料 52】は、「技能の知識を仲間とともに深め、課題解決に向けて練習に取り組む際に、解決すべき課題の優先順位、練習方法や具体的な体の動かし方について、グループの仲間と検討し、決定したことは、あなたにとって、授業で、どのように活かされましたか」という問いに対する、ある生徒の記述である。このように生徒たちは、できるようになった理由について振り返ることの大切さに気付いている。

自分にとってのたくさんの課題を調べ、達成していき、それをわかりやすくまとめて振り返り、また修正することができた。

【資料 52：バドミントンの取り組み方を振り返ることの大切さに気付いた生徒の記述】

また、「コート奥に打つフライト（ハイクリア・ロブ）」「鋭い打ち（スマッシュ）」「戦術（攻防の仕方）」においても、分析活動 2・3 を行い、リーグ戦に向けて練習を行った。

三次 (8/9~9/9)

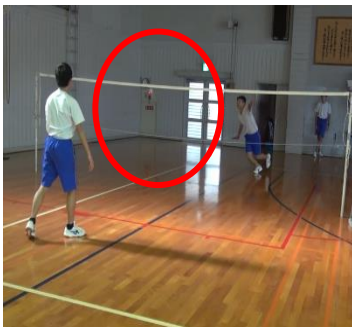
ねらい

学んだことを発揮し、リーグ戦を楽しむことができるようにする。

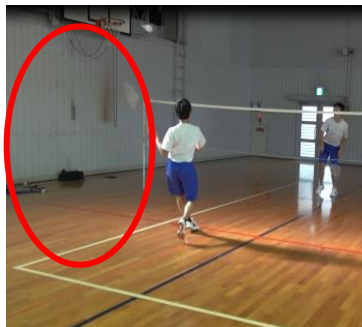
生徒の活動の内容と教師の支援

三次では、これまで学習してきたことを発揮することができるように、グループ対抗リーグ戦を行った。グループ対抗リーグ戦では、生徒たち自身でゲームを運営することができるように、生徒一人一人が役割をもち、責任をもってリーグ戦に取り組めるようにした。生徒の役割は次の通りである。

- 審判 (主審 得点係 線審係)
- ゲームの撮影係



【資料 53 : 空いている空間に攻撃している姿と空いている空間を作りだして攻撃している姿】



【資料 54 : 生徒の役割】

生徒たちは、リーグ戦の中で、空いている空間を攻撃したり、空いている空間を作りだしたり【資料 53】することができていた。また、生徒一人一人が役割をもってリーグ戦を運営したことは、責任感を持つことにつながった【資料 54】。【資料 55】は、リーグ戦終了後のある生徒の感想である。この生徒は、バドミントンで体重移動について学んでおり、そのことをテニスのスマッシュやストロークに活かしていきたいと考えている。また、バドミントンを高校でも継続してやっていきたいという期待感を抱いている様子が伺える。

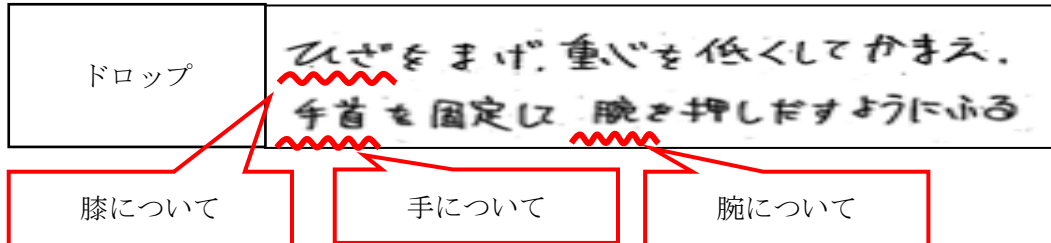
バドミントンで学んだ体重移動について、テニスのスマッシュやストロークに活かしていきたいです。また、バドミントンを高校の選択授業でしたいと思います。

【資料 55 : バドミントン終了後の生徒の感想】

5 結果と考察

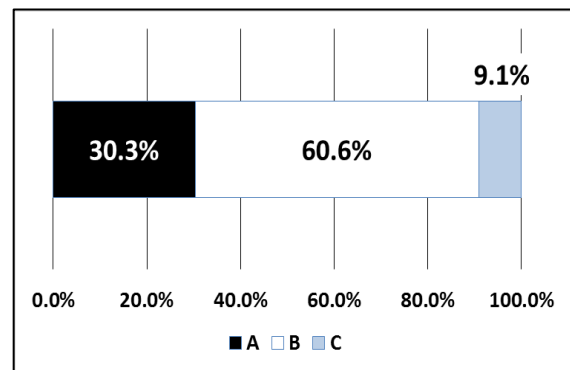
検証 1① 分析活動 1 は、バドミントンの行い方に関する知識を身に付けることに有効であったか。

検証 1①については、総括的評価における「技能のポイント」の記述内容を分析し、以下のABCの三段階で判定を行った。



【資料 56：Aと判断した技のポイントについての記入例】

A	自分が選択したフライトにおいて、1つのフライトにつき、異なる体の部位を捉えた技能のポイントの記述が3つ以上ある。
B	自分が選択したフライトにおいて、1つのフライトにつき、異なる体の部位を捉えた技能のポイントの記述が2つある。
C	A, B以外



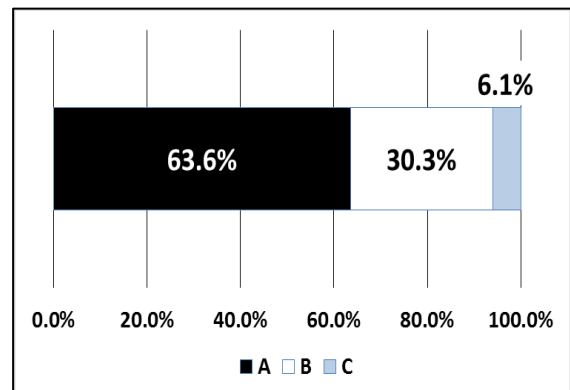
【資料 57：検証 1①の検証結果】

検証 1② 分析活動 1 は、バドミントンを「やってみよう」という関心をもつことに有効であったか。

検証 1②については、診断的評価と一次終了後のアンケートの差を比較し、以下のABCの三段階で判定を行った。ここでいうポイントとは5段階評定尺度（5：当てはまる 4：やや当てはまる 3：どちらでもない 2：あまり当てはまらない 1：当てはまらない）のことである。

アンケート項目・できないことは、できるようになりたい。(知的的好奇心)

A	診断的評価と一次終了後のアンケートの差が+2ポイント以上、もしくは、5を選択している。
B	診断的評価と一次終了後のアンケートの差が+1ポイント、もしくは、4を選択している。
C	A, B以外



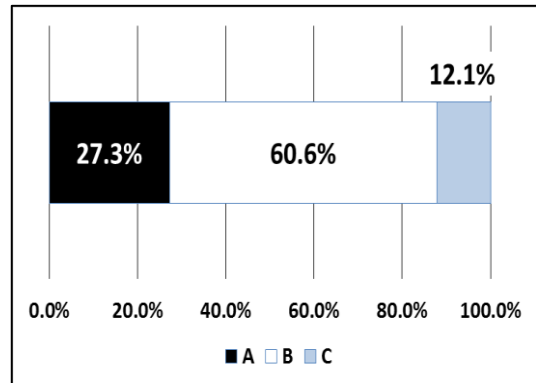
【資料 58：検証 1②の検証結果】

検証 1③ 分析活動 1 は、バドミントンの行い方に関する知識を身に付け、「やってみたい」という関心をもつことに有効であったか。

検証 1③は、検証 1①と検証 1②を総合的に判断して、以下のABCの三段階で判定を行った。

A	AA
B	AB BA BB
C	A, B以外

検証 1③の結果、Aは 27.3%、Bは 60.6%、Cは 12.1%であった【資料 59】。この結果から、分析活動 1 は、バドミントンの知識を身に付けて「やってみたい」という関心をもつことにおおむね有効であったと考える。このことは、ICT 機器や空間図を使って、自分のできていないことを把握し、必要感をもってフライトを選択したことが関心を高めることにつながったと考える。また、そのフライトについて、そのポイントを調べた後、技能チェックシートを使って同じフライトを選択した仲間とフライトのポイントを検討する活動で、多くのポイントから特に重要なポイントを整理したことや、実際に体を動かしながらポイントを検討したことで知識が身に付き、「やってみたい」という関心を高めることにつながったと考える。



【資料 59 : 検証 1③の検証結果】

検証 2① 分析活動 2 と分析活動 3 は、バドミントンの課題解決の見通しをもつことに有効であったか。

検証 2①については、「学びの軌跡シート」における記述を分析し、以下のABCの三段階で評価を行った。

課題

練習方法

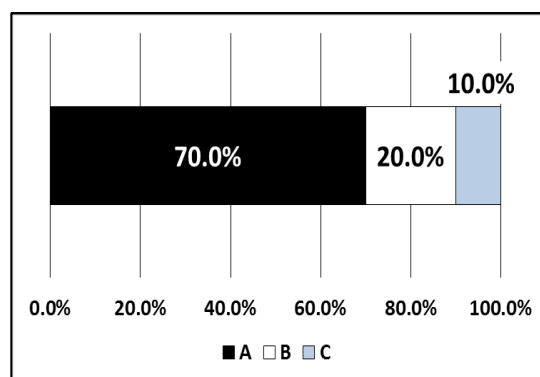
新たな気付き

具体的な体の動かし方

サーブがきれいに上がらねえという課題に対して、ラリーと吊球したシャトルを打つ練習をしたら、しっかり狙ってサーブを入れることができるようになった。そして新たに、前に打たれた時の対応がおきいという課題もわかった。その原因は、ハイクリアやロブを打った後に、後ろに下がったままで、定位置に戻れていなかったからだ。これは、次回はちゃんと定位置に戻って前の打球もしっかり対応できるようにしたい。

【資料 60 : Aと判断したバドミントンの取り組み方についての記述例】

A	Bの基準に加え、新たな課題への気付きを記述している。
B	バドミントンの取り組み方を、課題設定と練習方法の選択、具体的な体の動かし方を関連付けて振り返ることができている。
C	A, B以外



【資料 61：検証 2①の検証結果】

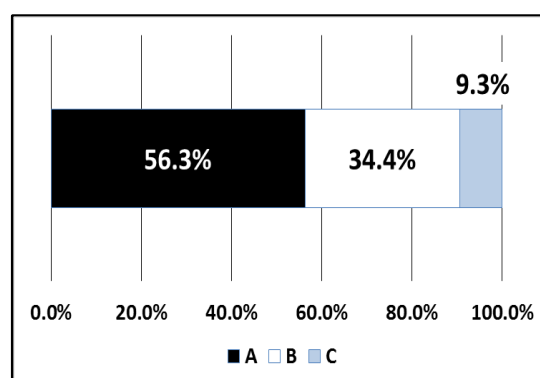
検証 2② 分析活動 2 と分析活動 3 は、「やっていこう」とする意欲をもつことに有効であったか。

検証 2②については、「学びの軌跡シート」の記述内容を分析し、以下のABCの三段階で判定を行った。

試合になるとスマッシュができなくなったり回数かへり、ハイリアの回数かふえいているので、相手をゆきまわり自分のペースにむくいきスマッシュを打てるように次からはがんばっていきたいです。

【資料 62：Aと判断した記述例】

A	授業の反省を踏まえ、解決策を講じて「できるようになる」「解決する」「頑張る」という思いを記述している。
B	「できるようになる」「解決する」「頑張る」という思いを記述している。
C	A, B以外



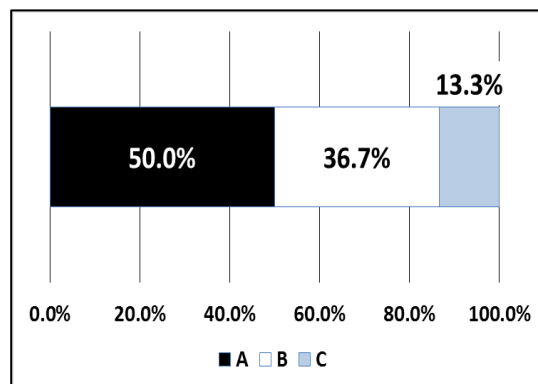
【資料 63：検証 2②の検証結果】

検証 2③ 分析活動 2 と分析活動 3 は、バドミントンの課題解決の見通しをもち、「やっていこう」とする意欲をもつことに有効であったか。

検証 2③については、検証 2①と検証 2②を総合的に判断して、以下のABCの三段階で評価を行った。

A	AA
B	AB BA BB
C	A, B以外

検証 2③の結果、Aは 50.0%、Bは 36.7%、Cは 13.3%であった【資料 64】。この結果より、分析活動 2 と分析活動 3 は、バドミントンの課題解決の見通しをもち、「やっぴいこう」とする意欲をもつことにおおむね有効であったと考える。検証 2①でA判定、B判定だった生徒 27 人のうち、検証 2②においてもA判定、B判定であった生徒が 26 人いたことから、自分の課題解決の過程を学びの軌跡シートに記入し、まとめの時間に振り返る活動を設定したことで、自分の取組を「自己の課題」→「解決方法」→「体の動かし方（具体的に気をつけること）」→「技能の高まり（成果や課題）」と一連の流れでたどることを繰り返す、その積み重ねが「できるようになれる」「解決できるであろう」という課題解決の見通しをもつことにつながり、次の技に対して「やっぴいこう」とする意欲が高まったのではないかと考える。

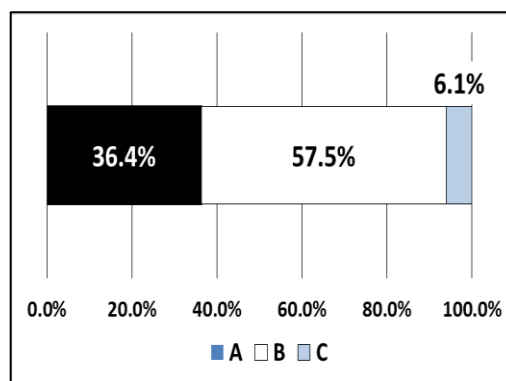


【資料 64 : 検証 2③の検証結果】

検証 3① 分析活動 2 と分析活動 3 は、バドミントンの技能を高めることに有効であったか。

検証 3①については、分析活動後のゲームのVTRを分析し、以下のABCの三段階で判定を行った。

A	ゲームにおいて、相手を前後左右に揺さぶり、空いた場所に正確に攻撃することができる。
B	ゲームにおいて、相手を前後左右に揺さぶり、空いた空間に攻撃することができる。
C	A, B以外



【資料 65 : 検証 3①の検証結果】

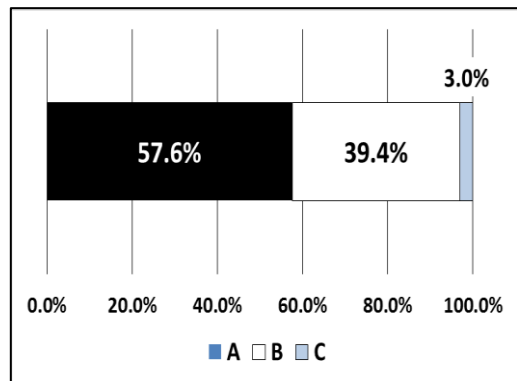
検証 3② 分析活動 2 と分析活動 3 は、バドミントンを「またやろう」という次への期待感を抱くことに有効であったか。

検証 3②について、運動へのかかわりに関する記述を分析し、以下のA B Cの三段階で判定した。

バドミントンを高校でやるだけでなく、バドミントンで身に付けた判断力を勉強、他のスポーツなど生活の中にも取り入れていきたいです。もちろん友達とバドミントンで遊んで楽しくやっていきたいです

【資料 66： Aと判断した次への期待感を記述している生徒の記述例】

A	Bの基準に加え、学習したことを、他の場面でも活用していこうとする記述がある。
B	バドミントンに取り組む姿勢について、積極的にバドミントンをする機会を求めようとする記述がある。
C	A, B以外



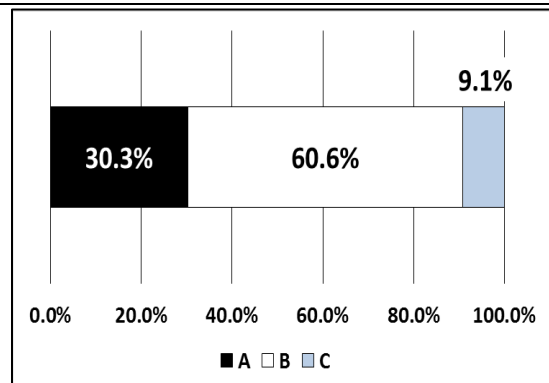
【資料 67： 検証 3②の検証結果】

検証 3③ 分析活動 2 と分析活動 3 は、バドミントンの技能を高め、「またやろう」という次への期待感を抱くことに有効であったか。

検証 3③については、検証 3①と検証 3②を総合的に判断して、以下のA B Cの三段階で評価を行った。

A	AA
B	AB BA BB
C	A, B以外

検証 3③の結果、Aは 30.3%、Bは 60.6%、Cは 9.1%であった【資料 68】。この結果から、分析活動 2 と分析活動 3 は、バドミントンの技能を高め、バドミントンを「またやろう」という次への期待感を抱くことに有効であったと考える。技能が高まった要因は、練習方法の内容を生徒の課題に応じたものになるようにしたことやグループの仲間と技能チェックシートを見ながら具体的な体の動かし方をしっかりと検討したことが考えられる。



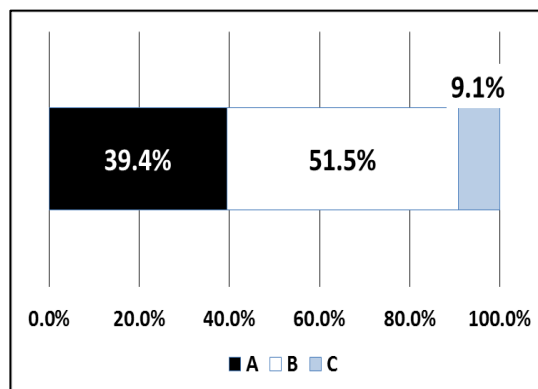
【資料 68： 検証 3③の検証結果】

検証4 「学びの軌跡シート」を活用した3つの分析活動は、保健体育科における学びに向かう力を育てることに有効であったか。

検証4については、検証1と検証2、検証3を総合的に判断して、以下のABCの三段階で判定を行った。

A	AAA AAB ABA BAA
B	A, C以外
C	CCC CCB CBC BCC

検証4の結果、Aは39.4%、Bは51.5%、Cは9.1%であった【資料69】。この結果から「学びの軌跡シート」を活用した3つの分析活動は、保健体育科における学びに向かう力を育てることに有効であったと考える。その要因は、バドミントンの行い方に関する知識を身に付けることで、「やってみたい」という関心をもつことができ、課題を解決する方法を仲間と検討し合い、繰り返すことで見通しをもつことになり、それが自ずと自分のものとなり、次の技に対して「やっていこう」とする意欲が高まったのではないかと考える。また、練習方法の内容を生徒の課題に応じたものになるようにしたことや、課題に応じた練習においては、グループの仲間と技能チェックシートを見ながら具体的な体の動かし方をしっかりと検討したことが、技能が高まった要因として考えられる。このことが、「またやろう」という次への期待感を抱くことにつながったと考える。



【資料69：検証4の検証結果】

6 成果と課題

(1) 実践Ⅱの成果

- 試しのゲームにおいて空間図を記入することで、自分に足りない技能に気付いたので必要感をもって技能のポイントを調べ、「やってみたい」という関心をもたせることにつながった。
- 課題を自己決定し、解決すべき課題の優先順位、練習方法や具体的な体の動かし方について、グループの仲間と検討し、決定して練習したことで、効率的に練習を行うことができ、ほとんどの生徒が、相手コートに空いた場所を攻撃したり、空いている場所を作りだして攻撃したりしてゲームをしようとする姿が見られた。
- 課題設定と練習方法の選択、具体的な体の動かし方をグループの仲間と検討し、決定して練習を行い、技能の高まりを自覚したことは、バドミントンを「またやろう」という次への期待感を抱くことにつながった。

(2) 実践Ⅱの課題

- 思考する活動が多くなり、技能習得の時間の確保が不足してしまった。今後は、より効率的に進めることができるように、思考の時間と技能習得の時間の配分を考えて授業を計画する必要がある。

Ⅶ 全体考察

1 実践Ⅰ「マット運動」と実践Ⅱ「バドミントン」の結果の分析

検証1 分析活動1は、運動の行い方に関する知識を身に付け、運動を「やってみたい」という関心をもつことに有効であったか。

マット運動では、A・B判定の生徒の割合が73.5%【資料28】、バドミントンでは87.9%【資料59】であった。この結果より、分析活動1は、運動の行い方に関する知識を身に付け、運動を「やってみたい」という関心をもつことにおおむね有効であったと考える。

これは、ICT機器や空間図を使って、自分ができていない点を把握し、必要感をもって「より高めたい」技能を選択する活動とその技能のポイントを調べ、技能チェックシートを使って同じ技能を選択した仲間と技能のポイントを検討する時に、自分に不足している内容を記入するだけでなく、実際に体を動かしながらポイントを検討する活動を組み合わせることによって知識が身に付き、生徒たちは「やってみたい」という関心をもつことにつながったからだと考える。

検証2 分析活動2と分析活動3は、運動の課題解決の見通しをもち、「やっていこう」とする意欲をもつことに有効であったか。

マット運動では、A・B判定の生徒の割合が84.4%【資料33】、バドミントンでは86.7%【資料64】であった。この結果より、分析活動2と分析活動3は、運動の課題解決の見通しをもち、「やっていこう」とする意欲をもつことにおおむね有効であったと考える。

これは、自分の課題解決の過程を学びの軌跡シートに記入し、まとめの時間に振り返る活動を設定したことで、自分の取組を「自己の課題」→「解決方法」→「体の動かし方（具体的に気をつけること）」→「技能の高まり（成果や課題）」と一連の流れでたどることを繰り返すことで、その積み重ねが「できるようになれる」「解決できるであろう」という課題解決の見通しをもつことにつながり、次の技に対して「やっていこう」とする意欲が高まったのではないかと考える。

しかし、運動の課題を解決する見通しをイメージすることが苦手な生徒には、運動の課題を解決する具体例を提示したり、仲間と検討する活動において具体的なアドバイスを送ったりする時間を十分に設定することが必要であったと考える。

検証3 分析活動2と分析活動3は、技能を高め、「またやろう」という次への期待感を抱くことに有効であったか。

マット運動では、A・B判定の生徒の割合が72.7%【資料39】、バドミントンでは90.9%【資料68】であった。この結果より、分析活動2と分析活動3は、技能を高め、「またやろう」という期待感を抱くことに有効であったと考える。

これは、練習方法の内容を生徒の課題に応じたものになるようにしたことや、課題に応じた練習においては、グループの仲間と技能チェックシートを見ながら具体的な体の動かし方をしっかりと検討したことが技能の高まりに影響したと思われる。また、運動課題を自分の判断だけでなく、仲間との相互評価で丁寧に設定し、技能が高まった過程を明らかにして練習したことで、設定した課題が解決されたり、技能が高まったりしたことで達成感を味わい、「またやろう」という次への期待感をもつことができたからだと考える。

検証4 「学びの軌跡シート」を活用した3つの分析活動は、保健体育科における学びに向かう力を育てることに有効であったか。

マット運動では、A・B判定の生徒の割合が87.5%【資料40】、バドミントンでは90.9%【資料69】であった。

マット運動終了後の感想には、「これからもマット運動をしていこうと思う。」という記述、バドミントン終了後の感想には、「将来、もしバドミントンをするようになったら、この授業のことを思いだして楽しくバドミントンがしたい。」といった記述など、運動を続けていこうとする態度が高まったと思われる記述が多く見られた【資料70】【資料71】。また、中には授業で学習したことを運動以外の場面にも活かしたいという記述をしている生徒も見られた。

僕はこれからもマット運動をしていこうと思います。
技のポイントを調べて、それを注意しながら、
1度やってみて自分の課題を見つけ、それを克服するために他の人の技を観察し、
技のポイントを意識しながら練習していこうと思います。
としても、難しい技をやってみようと思います。

【資料70：マット運動終了後の感想】

僕は最初はあまり、バドミントンが女子までにはなかったけど、練習してうちに、課題をみつけてそれを達成しようと努力したり、また新しい課題に向かって練習方法を考えることがとても楽しかったです。これから、将来もしバドミントンをするようになったら、この授業のことを思いだして楽しくバドミントンがしたいです。

【資料71：バドミントン終了後の感想】

よって、「学びの軌跡シート」を活用した3つの分析活動は、保健体育科における学びに向かう力を育てることに有効であったと考える。

2 研究の成果と課題

(1) 成果

- 分析活動1では、ICT機器や空間図を使って、自分ができていない点を把握し、必要感をもって「より高めたい」技能を選択する活動と、その技能のポイント調べ、技能チェックシートを使って同じ技能を選択した仲間と技能のポイントを検討する時に、自分に不足している内容を記入するだけでなく、実際に体を動かしながらポイントを検討する活動を組み合わせることで知識が身に付き、生徒たちは「やってみたい」という関心を高めることができた。
- 分析活動2と分析活動3では、課題を自己決定し、解決すべき課題の優先順位、練習方法や具体的な体の動かし方について、学びの軌跡シートを活用してグループの仲間と検討し、決定したことで、運動の課題解決の見通しをもち、その方法で「やっていこう」とする意欲をもつことができた。
- 分析活動2と分析活動3では、設定した課題が解決できたり、技能が高まったりしたことで、達成感を味わい、運動を「またやろう」という次への期待感を抱くことができた。

(2) 課題

- 運動の課題を解決する見通しをイメージすることが苦手な生徒には、運動の課題を解決する具体例を提示したり、仲間と検討する活動において具体的なアドバイスを送ったりする時間を十分に設定することが必要であった。

引用・参考文献

- ・ 中学校学習指導要領解説 保健体育編 文部科学省 2008
- ・ 次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ 文部科学省 2016
- ・ 初等教育資料 (2016. 3) 文部科学省 2016
- ・ 器械運動 指導の手引 文部科学省 2015
- ・ 体育の教育力 岸本肇 著 大学教育出版 2006
- ・ 中学校体育実技 学研 2015
- ・ 体育科教育 (2016. 11) 大修館書店 2016
- ・ ステップアップ中学体育 大修館書店 2014
- ・ 中・高校 器械運動の授業づくり 大修館書店 2006
- ・ 体育科教育学の探求 体育授業づくりの基礎理論
竹田清彦 高橋健夫 岡出美則 編著 大修館書店 1997
- ・ 体育授業の心理学 市村操一 阪田尚彦 賀川昌明 松田泰定 編 大修館書店 2002
- ・ 運動指導の心理学 運動学習とモチベーションからの接近
杉原 隆 著 大修館書店 2003
- ・ マイネル スポーツ運動学 クルト・マイネル 著
金子明友 訳 大修館書店 1891
- ・ バドミントン パーフェクトマスター 松野修二 監修 新星出版社 2011
- ・ 自己評価 「自己評価論」を越えて 安彦忠彦 著 図書文化 1987
- ・ 認知心理学 キーワード 森敏昭 中條和光 編 有斐閣双書 2005
- ・ 教育の小径 (2014. 3. No. 65) 北 俊夫 著 文溪堂 2014
- ・ 学ぶ意欲とスキルを育てる いま求められる学力向上策
市川伸一 著 小学館 2004
- ・ 学習意欲の理論 動機づけの教育心理学 鹿毛雅治 著 金子書房 2013
- ・ 「学力」の経済学 中室牧子 著 *ディスカヴァー・トクエンティーン* 2015
- ・ 児童・生徒のためのモニタリング自己評価法 ワークシートと協同学習でメタ認知を育む
中川恵正研究室 富田英司 編著 ナカニシヤ出版 2015
- ・ 学ぶ意欲の心理学 市川伸一 著 PHP新書 2001
- ・ 平成 27 年度 福岡県 児童生徒体力・運動能力調査 福岡県教育委員会 2016
- ・ 平成 28 年度 福岡県 児童生徒体力・運動能力調査 福岡県教育委員会 2017
- ・ 平成 25 年度 長期派遣研修員 研究報告書 福岡県体育研究所 2014
- ・ 平成 26 年度 長期派遣研修員 研究報告書 福岡県体育研究所 2015
- ・ 平成 27 年度 長期派遣研修員 研究報告書 福岡県体育研究所 2016

おわりに

教員として採用されてから6年が経過し、多くの先輩方からご指導を受けながら学級経営や部活動指導、生徒指導といった業務に従事してきました。また、保健体育の授業においては、宗像市教育センター研究員・福津市教育研究所員として勉強させていただきました。そのような中、福岡県体育研究所の長期派遣研修員のお話をいただき、1年間、研修の機会を与えていただきました。

体育研究所での生活は、毎日があつという間に過ぎ去る日々でした。3月、前年度の長期派遣研修員の方から体育研究所の1日の流れ等について説明を受けました。引き継ぎ資料に目を通しても、何が何だかわからず、不安が募りました。実際に4月に体育研究所に赴任してみると、電話や来客者への応対方法など、これまで経験したことがないものばかりでした。さらに、国の最先端の内容を講義してくださる専門研修（短期研修）で来訪される講師の先生方の話や指導主事の先生方の話を聞いていても、専門用語が飛び交い、全くついていけず、悔しい思いをしました。わからない言葉が出てきたら専門書を開き、また、本を読むなどして必死に言葉の意味を調べたことを思い出します。しかし、これらの経験から、これまであまり深く考えず使っていた言葉の意味や授業づくりにおける大切なことなどを学ぶことができ、少しずつではありますが、成長できたのではないかと思います。

研究においては、なかなか論が固まらず、苦しい日々が続き、何度、悔し涙を流したかわかりません。1年間、本当にやり抜くことができるかどうか、自信をなくしていました。しかし、そんな私に最後まで温かくご指導くださった指導主事の先生方には、本当に感謝しています。どんなに忙しい中でも時間を作って親身になって考えてくださり、具体的なアドバイスや励ましの言葉で自信を取り戻すことができました。検証授業では、在籍校を訪れ、今まで2年間教えてきた生徒たちと出会うことによって、「体育の授業を通してさらに成長して欲しい」という思いを再自覚することができ、さらに力を入れて研究にのぞむことができました。

体育研究所では、小・中・高等学校の3つの校種が集まり、研究を進めることができます。それぞれの校種の素晴らしいところを取り入れ、お互いの研究を見合い、お互いに切磋琢磨してきました。同じ悩みや苦しみ、喜びを共有し合い、共に過ごしてきた2名の先生方に感謝しています。

この1年間、目の前の生徒の成長のために悩んだことや苦しんできたことを決して無駄にせず、現場に戻って生徒たちに返していきたいと思います。そして、今後も研修に励み、自己研鑽を積んでいきたいと思います。

最後になりましたが、今回、このような貴重な研修の機会を与えていただきました、福岡県教育委員会、福岡教育事務所、宗像市教育委員会に厚く御礼申し上げます。また、本研究を進めるに当たり、ご指導いただきました福岡県教育庁体育スポーツ健康課、義務教育課、そして、福岡県体育研究所の皆様方に深く感謝申し上げます。さらに、検証授業にご協力いただいた宗像市立城山中学校の澁川義満校長、西島潔教頭、永野博之主幹教諭、井上伸和主幹教諭をはじめ、快く検証授業にご協力いただき、ご支援くださった保健体育科の西岡薫先生、山田浩史先生、片岡勝信先生、山本伸理子先生、小林千紗先生、授業をさせていただいた白木正先生、清水美貴先生、3年4・5組の男子35名の皆さんに心より感謝いたします。本当にありがとうございました。

今後ともより一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成29年2月17日

長期派遣研修員 吉廣 精人（宗像市立城山中学校）